

茂原市川代遺跡

—河川激甚災害対策阿久川調節池埋蔵文化財調査報告書—

平成14年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

も　ばら　し　かわ　しろ 茂原市川代遺跡

—河川激甚災害対策阿久川調節池埋蔵文化財調査報告書—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第437集として、千葉県土木部の阿久川調節池建設事業に伴って実施した茂原市川代遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代後期初頭の竪穴住居や人面把手土器を初め、古墳時代前期の土器集中地点などが検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成14年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水 新次

凡　　例

- 1 本書は、千葉県土木部による阿久川調節池建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、茂原市小林字川代3,215ほかに所在する川代遺跡（遺跡コード210-005）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、第2章第2節5を上席研究員 新田浩三が執筆し、それ以外を南部調査事務所市原調査室長 今泉 潔が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県一宮川改修事務所、茂原市教育委員会、財団法人総南文化財センターの御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図「茂原」(NI-54-19-12-3)
第2図及び巻末図面 1:500 千葉県一宮川改修事務所作成地形図
- 8 周辺地形の航空写真是、京葉測量株式会社による平成12年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 調査の方法	2
第2節 遺跡の位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
第2章 調査した遺構と遺物	6
第1節 遺構	6
1 A地点	6
2 B地点	8
3 C地点	10
4 D地点	12
第2節 遺物	16
1 土器類	16
A 縄文時代	16
B 古墳時代	20
C 奈良・平安時代	27
D 中世	29
2 土製品	30
3 瓦類	30
4 転用砥石	30
5 石器類	30
第3章 まとめ	35
第1節 縄文時代	35
第2節 古墳時代	35
第3節 奈良・平安時代	37

挿図目次

第1図 グリッド方眼網と調査範囲	2	第15図 古墳時代の土器（2）	23
第2図 川代遺跡と周辺の遺跡	4	第16図 古墳時代の土器（3）	24
第3図 A地点断面図	6	第17図 古墳時代の土器（4）	25
第4図 A地点全体図	7	第18図 奈良・平安時代の土器	28
第5図 B地点断面図	8	第19図 燭書き器・磁器・土製品・瓦類・転用砥石	
第6図 B地点全体図	9		31
第7図 SK27平面図・断面図	10	第20図 縄文時代の石器（1）	32
第8図 C地点全体図	11	第21図 縄文時代の石器（2）	33
第9図 C地点断面図、SK23平面図・断面図	12	第22図 その他の石器	34
第10図 SI01・SK15平面図・断面図	13	卷末図面1 調査地全体図（1）	
第11図 D地点全体図	14	卷末図面2 調査地全体図（2）	
第12図 縄文時代の土器（1）	17	卷末図面3 調査地全体図（3）	
第13図 縄文時代の土器（2）	19	卷末図面4 調査地全体図（4）	
第14図 古墳時代の土器（1）	21	卷末図面5 調査地全体図（5）	

図版目次

図版1 航空写真（平成12年撮影）	7 B地点調査風景（南から）
図版2 1 A・B地点遠景（南東から）	8 B地点実測風景（北西から）
2 A地点全景（南から）	図版7 1 C地点遠景（北から）
図版3 1 A地点遺物出土状況（南東から）	2 C地点全景（南から）
2 A地点遺物出土状況（北東から）	3 SK23全景（南から）
3 A地点遺物出土状況（南から）	4 SK23断面（南から）
図版4 1 B地点確認調査状況（東から）	図版8 1 D地点遠景（北から）
2 B地点近景（南東から）	2 D地点近景（南から）
図版5 1 B地点全景（南から）	図版9 1 SI01全景（南から）
2 B地点全景（北西から）	2 SI01埋甕全景（北東から）
図版6 1 SK27全景（東から）	図版10 土器類 古墳時代（1）
2 B地点遺物出土状況（北から）	図版11 土器類 古墳時代（2）、奈良・平安時代
3 B地点遺物出土状況（北西から）	図版12 土器類 縄文時代（1）
4 B地点遺物出土状況（東から）	図版13 土器類 縄文時代（2）
5 B地点遺物出土状況（東から）	図版14 土器類 縄文時代（3）・石器類 縄文時代
6 B地点遺物出土状況（北東から）	図版15 磁器・土製品・瓦類・転用砥石・貝類

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯（第2図）

茂原市内を東西に流れる一宮川は、流路延長約37km、流域面積約203km²の千葉県で管理する2級河川である。千葉県では県内の河川を自然的・社会的条件により地域区分しており、九十九里河川とする一宮川などを含む九十九里平野を緩やかに流れる河川については、河口部付近では河口閉塞がみられ、近年、中・上流部の市街化が進み浸水被害が常習化していると指摘している。

平成元年7月に一宮川流域では大規模な浸水被害が発生したので、河川激甚災害対策特別緊急事業（激特事業）による治水対策を着実に進めてきたためにしばらくは広範囲な被害はなかったが、平成8年9月の台風17号による豪雨は、平成元年の降雨量を大幅に上回り、一宮川流域では茂原市を中心に、浸水面積1,260ヘクタール、家屋の床上浸水1,118戸、床下浸水1,476戸にのぼる大きな被害をもたらした。今回の調査地一帯もほぼ冠水したようである。千葉県では、浸水被害が再び大規模なものとなったことから、直ちに激特事業の再適用を建設省に要請し、日雨量307mm、時間雨量43mmを計画対象雨量として、平成8年から5ヵ年計画で第2次激特事業が始まった。なお激甚災害対策特別緊急事業は昭和51年に発足した制度で、とくに大きな水害の発生した区間について再度の災害発生を防ぐため緊急に整備するもので、川が溢れる前に一時的に貯水する調節池の造成や、堤防のかさ上げや河道掘削で川の断面を拡げたり、護岸工事等を行うものである。一宮川流域の計画総貯水量は150万m³で、これは河川の越水による家屋の浸水被害を大幅に減少できる容量である。平成8年の台風17号と同規模の大暴雨を降らせた平成12年7月の台風3号ではほとんど被害もなく、これまで実施してきた改修工事の効果が徐々に現れはじめている。また一宮川流域の河川改修ではこれに併せて、一般市民が親しめる水辺づくりにも取り組み、周辺の景観との調和などを考えて、植栽・遊歩道・親水公園などの整備も行っている。

今回発掘調査の対象となった一帯は、計画水量を31万m³とする「阿久川調節池」の計画地にあたる。この第2次激特事業の事業化にあたって、一宮川改修事務所長から平成9年8月に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査の結果を踏まえて、同年9月に事業地内的一部分に遺跡が所在する旨の回答をした。この回答を受けて、その取り扱いについて関係機関で協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財團法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。発掘調査は事業スケジュール等を調整した上で、平成12年2月より実施する運びとなった。

なお調査地の一部には宅地跡があったものの、ほとんどが荒蕪地になっており、なかには雑木や竹が寄生しているところもあったので、伐木・下草刈りを行った上で調査を開始した。

2 調査の経過

川代遺跡の発掘調査及びその後の整理作業は3か年にまたがっている。各年度ごとの組織・作業内容等については以下のとおりである。

平成11年度 平成12年2月1日～同年3月27日

内容（上層）確認調査 9,189m²のうち1,039m²・（上層）本調査4,100m²
南部調査事務所長 高田 博 副所長 小久賀隆史 調査担当者 室長 麻生正信
平成12年度 平成12年6月19日～同年9月29日

内容（上層）確認調査 15,120m²のうち1,827m²・（上層）本調査1,800m²
南部調査事務所長 高田 博 副所長 小久賀隆史 調査担当者 室長 今泉 潔
平成13年度 平成13年4月1日～同年7月31日

内容 水洗・注記の一部から原稿執筆・報告書刊行

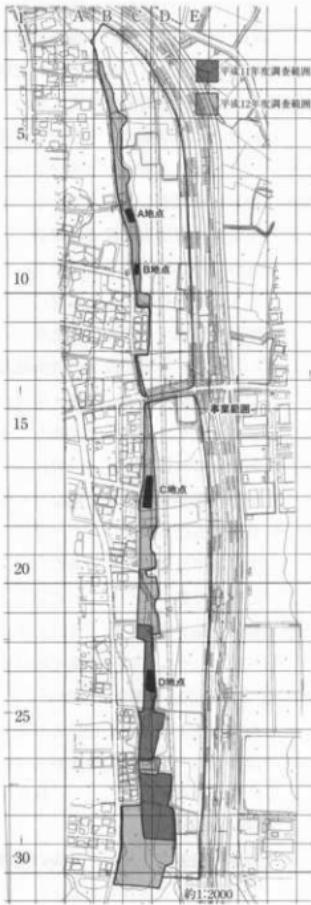
南部調査事務所長 高田 博 副所長 小久賀隆史 調査担当者 室長 今泉 潔

3 調査の方法（第1図）

調査にあたっては、調査地全域を覆うように、国土方眼座標（第IX座標系）のX = -60,680 Y = 42,960を基点¹⁾に40m × 40mの方眼網を設定し、これを大グリッドとした。名称は起点から南北方向に南へ1, 2, 3、東西方向には東へA・B・Cとし、この数字とアルファベットを組み合わせてグリッド名とした。そしてその大グリッドをさらに4m四方のマスで100分割し、北西隅を00、南西隅が99になるように割り振り、これを小グリッドとした。現地ではこれを組み合わせて、たとえば23C—45というように表記した。この表記は遺物の注記にあたっても踏襲している。

調査はまず確認調査を調査対象面積の10%を目安に、微地形等を考慮に入れながら任意にトレーナーを設定した。今回は調査地が南北に非常に長いこともあって、トレーナーはほとんど東西方向に設定することになった。必要に応じて、トレーナーを拡張して、遺構・遺物の広がりを把握するように務め、また遺構の性格・時期・深度等を把握するために、トレーナー内で一部埋土の掘り上げも行った。なお平成11年度の調査分については個々のトレーナーに名称は付していない。したがってトレーナー出土の遺物は、グリッド名で取り上げている。平成12年度調査分については、図中に示したように順次トレーナーに1から通し番号を付し、トレーナー出土の遺物もすべてトレーナー番号で取り上げてある。そしてこの確認調査の結果を踏まえて本調査範囲を決定した。

本調査にあたっては、各遺構に種別と通し番号を付した。種別についてはアルファベットの略号を用いて、竪穴住居をSI、溝をSD、土坑をSK、掘立柱建物をSBなどとし、これに通し番号を付したが、調査年次ごとの区別はしていない。今回の報告にあたっては、当初の遺構番号・種別を変更したり、



第1図 グリッド方眼網と調査範囲

追加したものはない。ただ平成12年度に本調査を実施した土器出土集中地点については、今回の報告にあたって説明の便宜上 A 地点・B 地点・C 地点として報告している。これは整理作業の段階から地点名を付して諸作業を進めたためで、現地調査の段階では、地点に設定したトレンチ番号で遺物の取り上げや記録作成を行ったものである。ちなみに A 地点は45トレンチ、B 地点は42トレンチになる。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第2図、図版1）

川代遺跡が位置する茂原市は千葉県のほぼ中央に位置し、都心からは74.1kmの距離にあり、首都圏近郊整備地帯の外周部に隣接している。房総半島には、太平洋側から東京湾側に上総層群と上位の下総層群が北西傾斜の単斜構造をなして分布し、茂原市を中心とする長生地域は、沖積層が広く分布する九十九里平野と呼ばれる海岸平野のほか、上総層群からなる丘陵地を含む。丘陵奥部には標高173mの権現森が隆起しており、太平洋・東京湾の分水嶺となっている。海岸地帯は弓状に湾入した砂丘が連なり、低層泥炭地と旧砂丘からなる沖積層が堆積する。後背には砂の堆積と基盤の隆起を物語る砂丘列を残している。そして西部からは長生郡長南町深沢地区等を水源とする一宮川が、小さな丘陵が連なる北側の長柄丘陵と南側の長生丘陵の間を流れ、谷底平野である一宮川低地で三途川・豊田川・阿久川・鶴枝川・瑞沢川などの支流と合流しながら、海岸平野を横切って長生村南中之瀬で太平洋に注いでいる⁹。

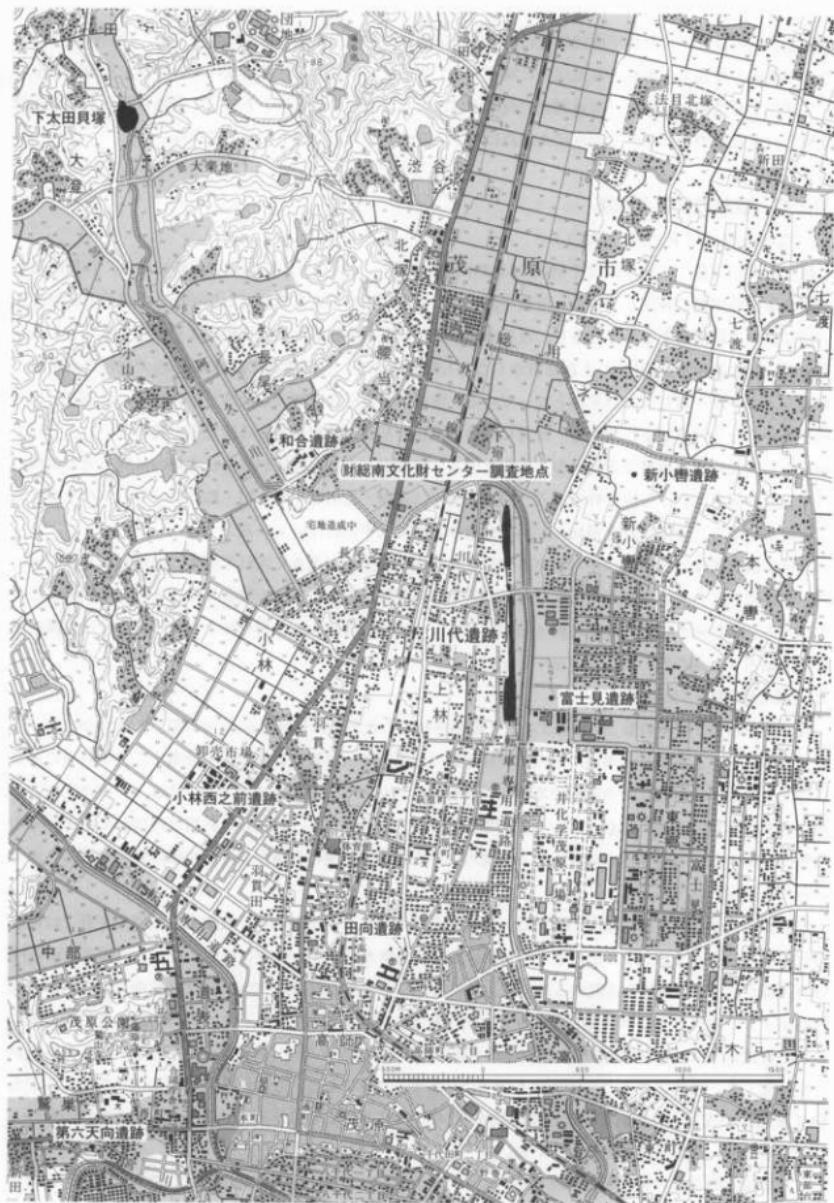
今回の調査地は、丘陵地帯から南東方向に流れてきた阿久川が大きく流れを変え、南流しはじめる地点の右岸に位置し、海岸平野から長柄丘陵へ移行する後背低地のもっとも丘陵寄りの砂堤带上に位置することになる。なお阿久川はこのまま約4km南下して、一宮川に合流する。調査地と現海岸線までは直線距離で約9kmあり、調査地の標高は6m～8mになる。

2 歴史的環境（第2図）

茂原市の市名が「藻の原」に由来する、と説明されることがしばしばある。「藻の原」とはかつて海が入り込んでいたことを表し、事実、市内の沖積平野の地表下4m付近に貝層が広く分布する。これらの貝層は古九十九里湾の海底に川や潮流で堆積した砂層に、ハマグリ・アサリ・カキ・キサゴ・アカガイなどの、現在も潮間帯から浅海に生息している貝が堆積してきたもので、一般に茂原貝層と呼ばれている。その種類や産状から、当時は淡水の流入する湾奥のような浅海で、潮の干満があり、潮流の変化が激しい海であったと推定されている。

旧石器時代から縄文時代前半の遺跡は、西部の丘陵地帯に分布しており、茂原市内の沖積平野では縄文時代の前期になるまで、今までのところ遺跡はおろか遺物の出土すら確認されていない。川代遺跡から1.8kmほど離れた、川代遺跡と連続する砂堤带上に位置する小林西之前遺跡¹⁰では、縄文時代前期浮島式の土器片が出土し、遺構としては後期初頭の竪穴住居2軒と土坑を調査している。また川代遺跡の対岸に位置する新小幡遺跡¹¹では縄文時代前期後葉の深鉢土器の破片が出土するなど、前期頃から平野部での人の活動痕跡が確認でき、後期になると生活痕跡も確実に存在するようになる。なお阿久川の上流部に位置する下太田貝塚¹²は、小支谷内に位置する低湿地性貝塚で、中期から後期にかけての墓域とそれに伴う多数の埋葬人骨がみつかり、貴重な成果をあげている。

これ以降平野部での遺跡数も順次増加していく。弥生時代では中期の標式遺跡として著名な宮ノ台遺跡が丘陵上の遺跡として知られているが、遺跡数はむしろ砂堤带上や丘陵裾部に立地する例のはうが多くな



第2図 川代遺跡と周辺の道路

(※平アミをかけた範囲は、「一宮川流域浸水実績図」より
作成した、平成8年9月22日(台風17号)の浸水範囲)

る。丘陵裾部の標高18m～22mの微高地上に位置する宮島遺跡¹⁾では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての堅穴住居が重複して12軒みつかっている。また川代遺跡のD地点の対岸一帯は、富士見遺跡という弥生時代の遺跡として知られている。また、宮川の支流である豊田川に面した微高地上に位置する国府閔遺跡²⁾では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落と墓域がみつかり、また自然流路からは建築材や農耕具などの多量の木製品が出土した。木製品のなかには全長161cmの日本最大級といわれる琴板や赤彩木剣・蓋などの希少な木製品も含まれている。

古墳時代の集落としては、第六天向遺跡³⁾で前期の堅穴住居を4軒確認しており、中原遺跡⁴⁾でも堅穴住居を確認しているが、これらの遺跡はいずれも標高10m程度の・宮川中流域の河岸段丘上に位置している。また阿久川の上流の丘陵裾部に位置する和合遺跡では、前期の堅穴住居を1軒調査している⁵⁾。そして奈良・平安時代になると遺跡の大半が沖積平野に移って、土地利用が本格的に低地を対象とするようになってきたことがわかる。田向遺跡⁶⁾では8世紀末～9世紀初頭の堅穴住居を2軒、小林西之前遺跡では井戸・土坑・溝、中原遺跡では11軒の堅穴住居を調査しており、前代よりもさらに確かな足取りを見て取れるようになる。

そして15・16世紀になると、阿久川左岸の新小轡遺跡で掘立柱建物や溝を確認しており、さらに海側に開拓地を切り開いていった様子が窺える。ただこうした推移の背景には、低地の隆起やそれに伴う乾燥化・陸化などという自然的要因や水田の確保というような人的要因などが複雑に絡み合って、現在に至っているのであろう。

ちなみに川代遺跡の調査歴としては、遺跡の北端部を平成10年に（財）総南文化財センターが宅地造成に伴って調査を実施している。その調査結果によると、平安時代と考えられる東西方向と東南方向に走行する溝2条と近世以降の土坑・井戸などを調査している。現地の地表には土器片が多く散布していたことから、密度の高い遺構群の存在が予想されたが、調査結果はそれとは異なる結果だったことから、地表面の遺物は客土等に伴う可能性があると指摘されている⁷⁾。

注1 この基点は、（社）日本測量協会の精密測地網「一次基準点測量作業規程によるBessel梢円体での緯度経度値は、北緯35°27'07.4369"、東經 140°18'23.9413"になる。

2 記述にあたっては、おもに国土地理院 1987『土地条件図 茂原』を参考にした。

3 津田芳男 1985『小林西之前遺跡』（財）茂原市文化財センター

4 風間俊人 1992『新小轡遺跡』（財）長生都市文化財センター

5 菅谷通保 1998・2000『下太田貝塚』『年報No10・11』（財）総南文化財センター

6 津田芳男 1995『宮島遺跡』（財）長生都市文化財センター

7 菅谷通保ほか 1993『国府閔遺跡群』（財）長生都市文化財センター

8 三浦和信 1989『第六天向遺跡』（財）茂原市文化財センター

9 注の2に同じ。

10 松本昌久 1994『和合遺跡』（財）長生都市文化財センター

11 風間俊人 1994『田向遺跡』（財）長生都市文化財センター

12 風間俊人 2000『川代遺跡』『年報No11』（財）総南文化財センター

第2章 調査した遺構と遺物

第1節 遺構

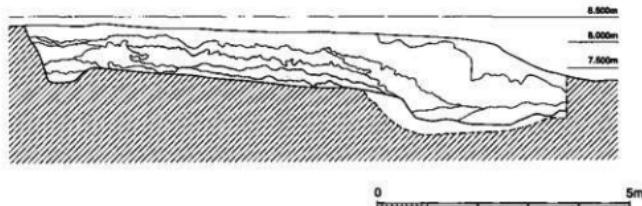
今回報告する川代遺跡の調査地は総延長が1.1kmにも及び、しかも微高地の先端部分ということもあって、調査範囲が非常に細長い。したがって本調査地点が大きく4か所に分かれて途切れ途切れに存在する。報告にあたっては説明の便宜上、本調査地点を北から順にA・B・C・Dの4地点として調査成果を説明していくことにする。A・B・Cの3地点はおもに土器が集中して出土した地点で、D地点では縄文時代以降の遺構を調査した。なお整理作業を進めるなかで、遺構の帰属時期が近世以降と考えられるものや、結果として帰属時期を特定できなかった遺構については説明を省略し、その位置等については全体図のなかに示した。

1 A 地点 (第3・4図、図版2・3)

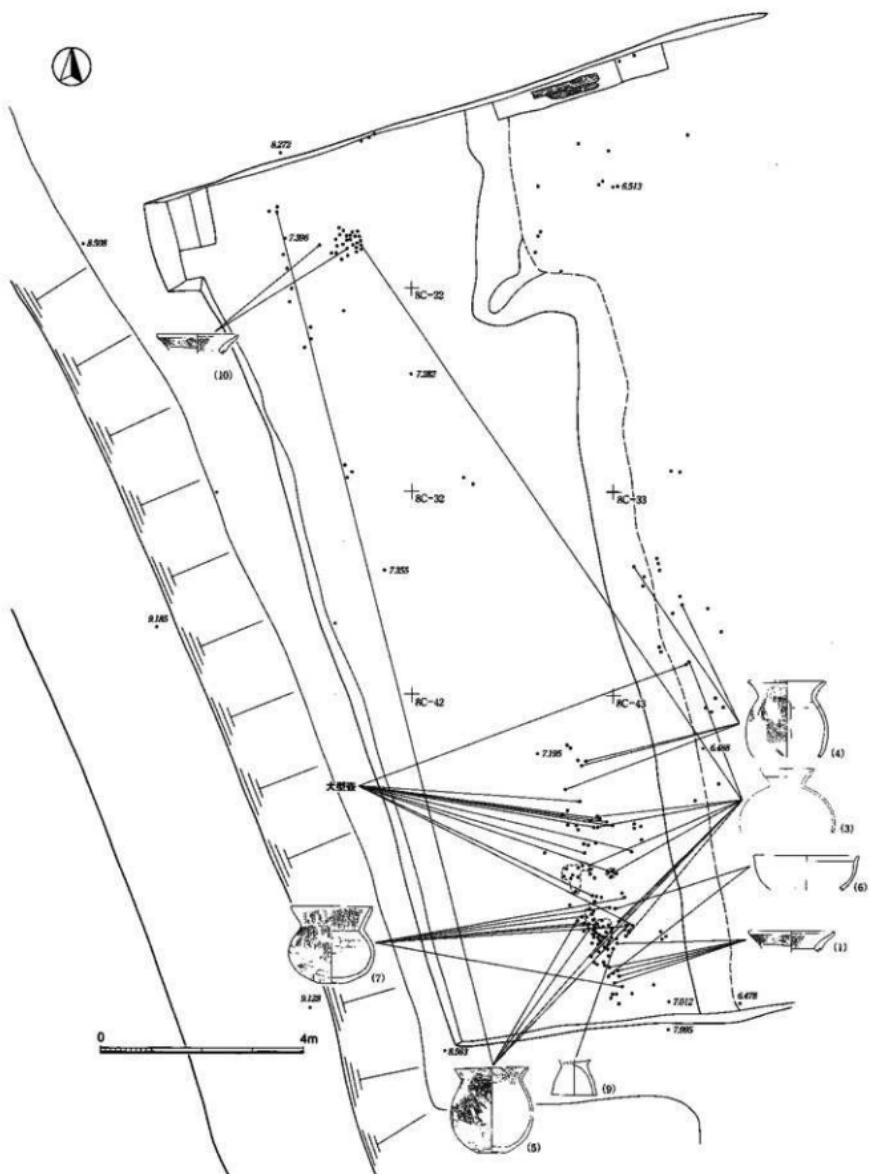
阿久川が大きく南に流れを変える地点の近くに位置する。トレンチでは44・46トレンチの間になる。調査した範囲は南北に長い調査区で、調査時の基盤の標高は7m～7.5mで、基盤は川に向かって緩やかに傾斜し、先端部で急に傾斜して湿地に落ち込んでしまう。断面を観察した中央部でその堆積状況をみてみると、最上層は表土層で、その下にやや黒みのある暗茶褐色砂質土が堆積している。遺物はその下に堆積する、層厚40cm～50cmほどの黒褐色砂質土を中心に出土した。その堆積範囲は中央部付近から東側のみで、西側では暗茶褐色砂質土になり、調査区の西壁では層としてはまったく確認できなかった。黒褐色砂質土とした層(図面中に平アミで表した範囲)は途中から上下2層に分かれれる。上層は比較的安定して堆積する漆黒の砂質土になる。下層は途中から派生する層で、基盤層の灰白色砂質土をブロック状に含んでいる。その下が基盤層への漸移層になり、灰白色砂質土をかなり多く含む。基盤層とした層は、一部掘り抜いて確認したところ暗灰黄色砂質土の単純層で、かなり多く灰白色砂質土を含んでいる。基盤層は堅く締まっており、遺物も基盤層にめり込むような状態で少し出土しただけで、まとまった出土はなかった。

なお土層観察地点の東端部で、おそらく沼沢地への足場組と考えられるような木材群が出土した。木材が新鮮だったために取り上げていないが、北側平坦部の抉り込みと一連になる工作と思われる。

遺物はおもに調査区の南端近くに集中して出土した。そして基盤層が急に傾斜する崖線から1.5mほど西側、つまり陸側に細長く比較的まとまって出土している。遺物分布図から、接合資料もしくは同一個体と思われる資料が広範囲に散乱している状況がわかる。また一部の資料は基盤の傾斜を下った地点からも出



第3図 A 地点断面図



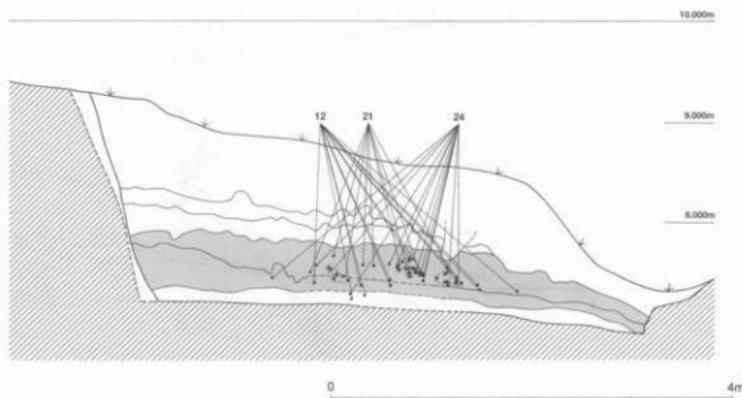
第4図 A地点全体図

土している。これらは土砂の移動等に伴って、傾斜に沿って徐々に落下したものであろう。なお出土地点を押さえることができなかった資料として、重機でトレンチを掘削している際に、ほぼ中央部で大型の土師器壺の破片がかなり出土した。この資料については、部位を特定できる破片もなかったので、残念ながら実測図も図示できなかった。

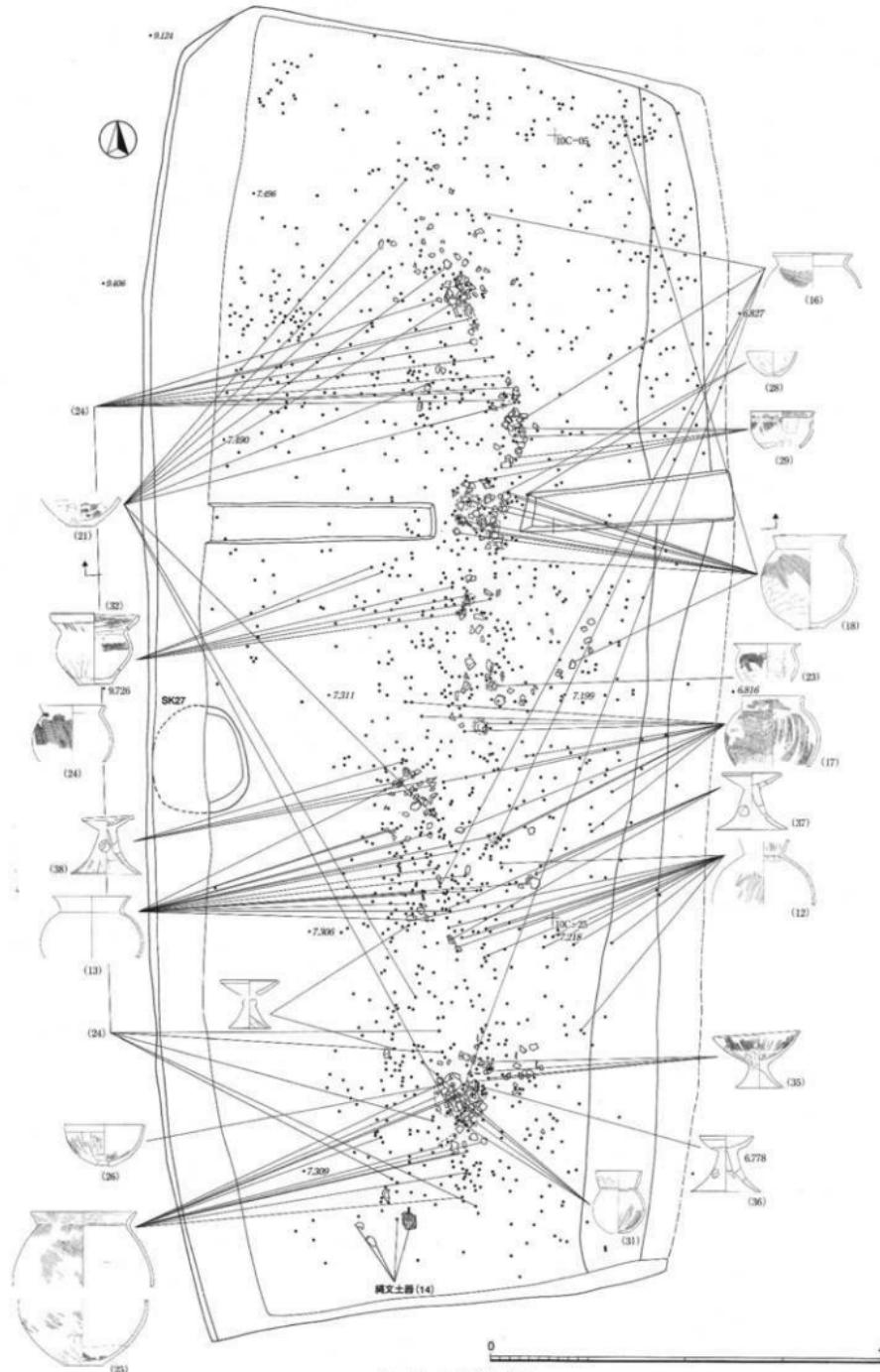
2 B 地点（第5～7図、図版4～6）

B 地点は A 地点より 80mほど下流側に位置し、確認トレンチでは 42 トレンチになる。この付近は微高地のせり出しが調査区の境界、すなわち現道からさほどない地点が多かったが、B 地点ではそれでも数 m は現道からせり出していた。しかし遺物の出土した深さが現道部分から 2m 前後あり、相応の保安距離をとったので、調査が可能だったのは東西方向で 4.5m ほどになった。確認調査時点で、かなりの量の遺物が出土することがわかったので、その時点で極力遺物の出土地点を押さえた。したがって遺物分布図に掲載した土器の出土地点は、確認調査から本調査まで一貫するものである。また合わせてトレンチの南壁で断面図も作成した。B 地点では遺物の集中地点以外に、遺構も確認することができたので、合わせて報告する。なお本調査にあたっては、確認調査の段階で遺物の出土層位が後述する黒褐色砂質土に集中することがわかったので、その直上までを重機で排土して調査を実施した。

堆積土は川側へ幾分の傾斜は認められるが現表土ほどの傾斜ではなく、比較的安定した堆積状況を示していた。上部には表土層がかなり厚く堆積しており、60cm～80cm 前後の厚みがある。調査前には立木が随分あったようで、木の根による搅乱が多数あった。その直下に黒褐色砂質土と灰色砂質土が混在する、堅く締まった暗褐色砂質土が 20cm ほどの厚みで堆積しているが、途中で消滅する。その下にはサラサラした暗褐色砂質土が堆積し、やはり 20cm ほどの厚みがある。その下の黒褐色砂質土層の上下 2 層が、遺物が集中して出土した層になる。上層は下層に比べて茶色系で黒みが少ない。下層は漆黒といえるほどの黒みがあり、A 地点とは堆積土にやや異同がある。そして基盤層は灰色砂質土で、部分的に黒褐色砂質土をブロック状に含んでいる。



第5図 B 地点断面図



第6図 B地点全体図

遺構としてはSK27を調査した。調査区の境界近くにあるために、遺構の半分ほどしか調査することができなかった。SK27は調査区中央部の西側で位置する。遺構の確実な掘り込み面は断面を観察しても土色に紛れて確認できなかったが、黒褐色砂質土層の上層のなかで掘り込まれているのは確かである。しかも埋土に黒褐色砂質土層の下層の土が流れ込んでいたので、出土した土器群とはほぼ同時期の遺構と判断した。埋土の性状は人為的埋没といえるほどの、土の攪拌は認められなかった。黒褐色砂質土層の下層からの深さは40cmほどで、基盤層へは数cmしか掘り込んでいなかった。平面形状はほぼ円形に推定でき、直径1m前後の土坑と思われる。壁はかなり直立気味に掘り込まれており、壁の崩壊土もさほどなかった。出土遺物はとくなく、土坑の性格について特定する根拠はない。

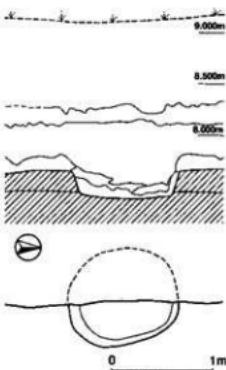
B地点で出土した土器は、地点を押された資料でも1,800点を超える。小さな破片はほぼ全面といつていいほどに散布しているが、ある程度の大きさのある資料になると、その分布状況は微高地の傾斜線と平行して、帯状に出土している。実測図を示した資料の範囲では、大型の器種は地点の全体で出土しているが、小型の高杯・器台・壺等では比較的の南半部に集中している。なお16・21・24のようにかなり距離が離れた、個体もしくは同一個体と思われる土器片もあるものの、それらを除けばある程度の範囲でまとまって出土しているように見える。とくにもっとも南に位置する出土単位からは、25・26・31・33・35などの完形もしくは完形に近い資料が出土した。出土状況も26の単孔の鉢を中心にして、それを囲むようにその他の資料が出土しており、出土状況に意図的な集積を窺わせるものがある。中央部の接合状況はやや散漫で、破片自体が散乱している。それより北側では上器の出土範囲が3ないしは4単位ほどにまとまる傾向があるが、器種そして個体数はかなり限られてしまうようである。なお最南端部では、古墳時代の資料に混じて縄文時代中期勝坂期の鉢の破片がやまとまって出土した。精査した範囲では、それに伴う落ち込み等は確認できなかった。

3 C地点（第8・9図、図版7）

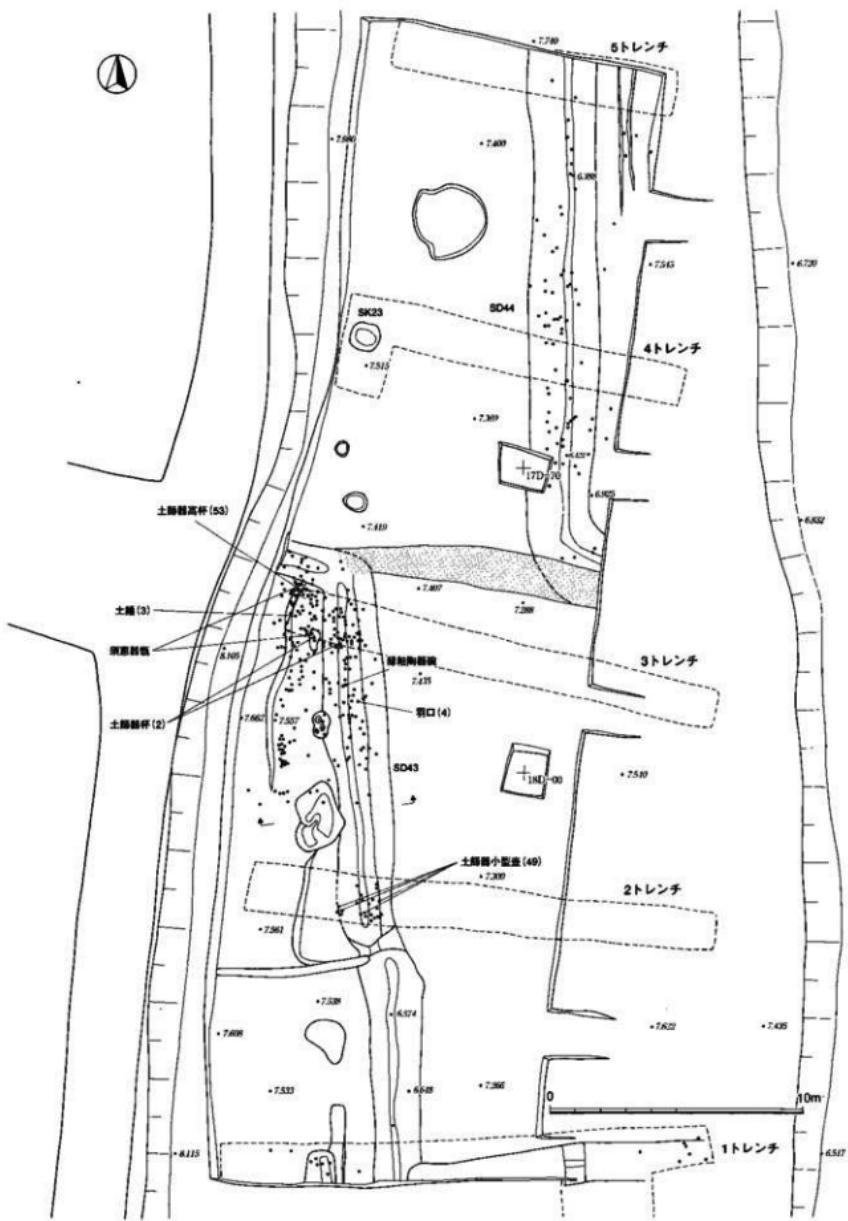
C地点は今回の調査地のはば中央に位置する。微高地の変換線からは、3m～10mほど陸側になる。遺物集中地点は、A・B地点のような特定層から出土しているのではなく、近世以降と思われる溝やその周囲のくぼみから出土している。したがって古代の遺物の中に、近世以降の陶磁器片も混在するような状況であった。なお遺構としては単独の土坑であるSK23を調査した。

C地点一帯の堆積土は、微高地の傾斜に沿ってやや傾斜しているものの、ほぼ水平に堆積している。上層は粒径5mmほどのスコリアと黄褐色砂粒を少し含む暗褐色砂質土である。腐植土を主体とする表土層とは性状がやや異なり、下の層との境界も明瞭なことから客土された土の可能性もある。その下に黒褐色砂質土層が堆積している。SD43・44はこの層を切り込んで掘り込まれている。そしてこの層は川側へ向かうにつれ、層の芯になるような粘性が非常に強い層が派生し、微高地の変換線近くになって、基盤層に密着した層になる。この層は調査地南部の確認トレンチでも部分的に確認できた。基盤層は白色砂質土で、上面は黒褐色砂質土を斑点状に含んでいる。

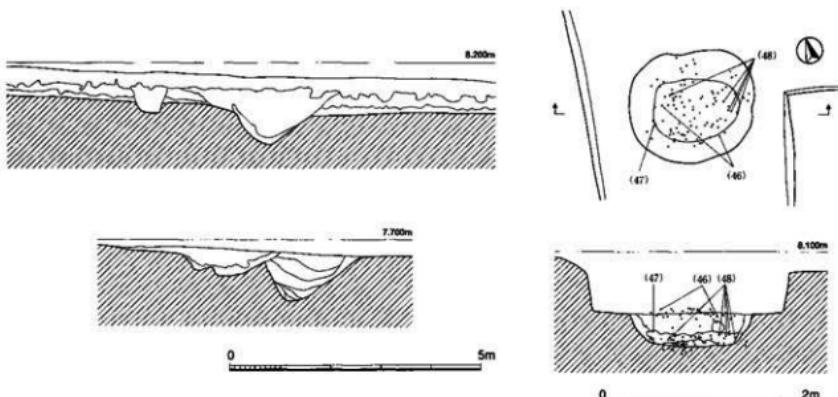
SK23は、やや東西に長い長円形の土坑である。長軸1.2m、短軸1.1mで、深さは確認面から30cmほどで



第7図 SK27平面図・断面図



第8図 C地点全体図



第9図 C地点断面図、SK23平面図・断面図

やや擂鉢状になっている。埋土は上層が粒径5mmほどのスコリアを少し含む黒褐色砂質土層で、その下に暗茶褐色砂質土が堆積し、それ以外の部分は土坑の崩壊土と思われる基盤層の土を混在する層からなっている。出土遺物は古墳時代後期の坏・高坏・壺の土師器片だけで、須恵器や他の時代の資料は1点もなかった。地点を押された資料は100点近くになるが、土坑内でとくに偏在するような出土傾向は認められなかった。なお砂層という脆弱な地盤のためと思われるが、一部の資料は基盤層にめり込んで出土した。出土資料はいずれも小破片で、接合資料も少なく、土坑の機能までは不明である。

土器が出土したSD43・44は、C地点の調査区のなかではほぼ直角に折れ曲がり、両者はその屈曲点が斜に向かい合うように位置している。SD43はC地点で曲がってから、現道と平行するように南へ延びるのをC地点より南側の確認トレンチで確認している。溝の底面は酸化鉄を主成分とするような色調だったので水流があったことを窺わせるが、C地点のなかで底面が少し立ち上がる部分があるので、これは水流というよりはむしろ湧水による影響と考えたほうがよいかもしれない。なお、底面の立ち上がりは溝の輪郭自体が連続するので、溝を開削する際の施工単位の区切りだった可能性もある。溝の屈曲点の西南側にくぼみがあり出土遺物は、そのくぼみと溝内からおもに出土した。古墳時代前期から近世まであり、古墳時代の小壺壺の49は2分の1ほど遺存しており、遺存状態はよかった。また小破片のため図示できなかつたが、縁釉陶器の碗などもあった。土器類以外には罐の羽口などや特殊な遺物も出土したが、それ以外に精練関係の資料は出土しなかつた。

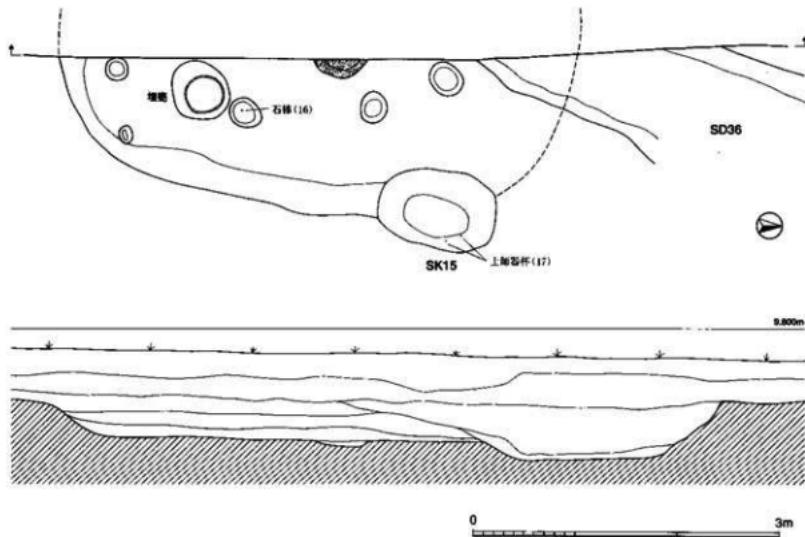
SD44はC地点のなかほどで川側へ折れ曲がり、それより北については、6・7トレンチでその延長を確認したに過ぎないが、線形は徐々に川側の沼沢地に近づいていくようである。出土遺物は土器の小片が溝とその周囲から出土したが、とくに図示できるような資料はなかつた。

4 D地点（第10・11図、図版8・9・15）

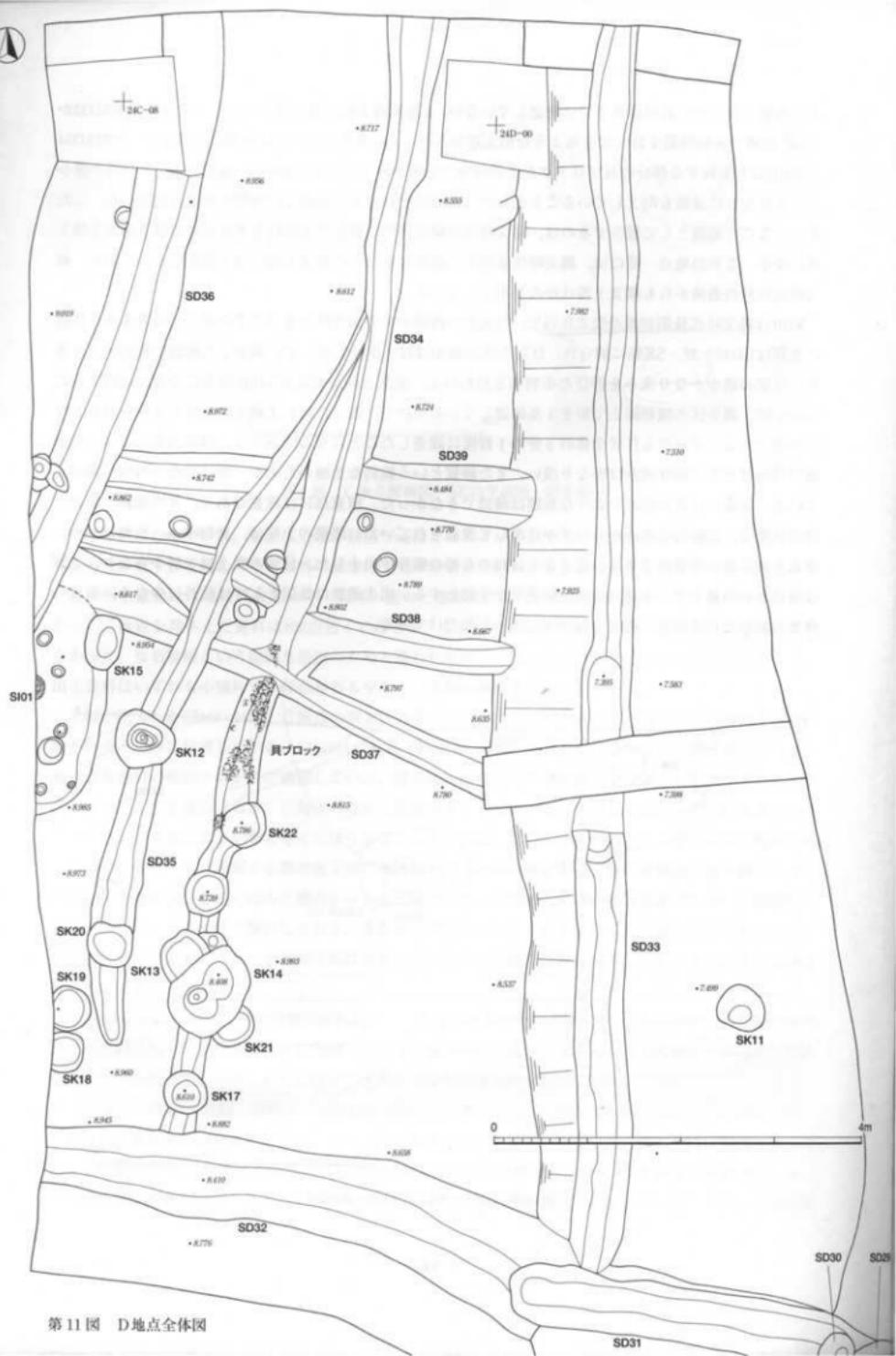
D地点は調査地の南半部に位置し、グリッドの東西ラインでは24-00から24-60の範囲に相当する、南北に長い地点である。調査地の東西に2分する位置よりもやや東側で段差があり、1mほど東側が低くなっている。溝は南北方向に走行するものと東西方向に走行するものがあり、錯綜している。それらを造構理

土での切り合いかから新旧関係までは確認していない。また東西方向の溝と段差に沿って走行する溝SD33からは、遺構の所属時期を特定できるような出土遺物もなく、時期等については不明な点が多い。ただSD34ではSD37と重複する部分の貝ブロックがその部分で分断されているようなので、後述するそれ以外の溝からはそれなりに遺物も出土していることから、ここではそれよりも新しい時期の所産と判断した。したがってここで遺構として報告するのは、縄文時代の竪穴住居1軒と平安時代と考えられる溝3条と土坑1基になる。なおD地点一帯には、縄文時代前期から晩期にかけての縄文土器の包含層が広がっており、縄文時代以外の遺構からも縄文土器はかなり出土している。

SI01は縄文時代後期初頭の竪穴住居で、D地点の西側中央の調査区の境界にまたがって位置する。住居の北側はSD36・37・SK15に切られ、住居全体の様相ははっきりしないが、調査した範囲で推定するかぎり、住居の隅がかなり丸みを帯びた小判形と思われる。南北方向は推定で5.10mほどになる。東西方向については、調査区の境界線上で戸を1基確認しているだけで、他に住居の主軸を決定するような材料もなく不明である。それでも住居全体の3分の1程度は調査したことになるであろう。確認面からの深さは南側で15cmほどと、掘り込みはかなり浅い。また砂質という脆弱な土壤のためか、壁はかなり外側へ傾斜している。床面には踏み固めたような形跡は確認できなかった。南東部には埋甕があり、8の深鉢土器が正位の状態で、口縁部を床面からわずかに突出して埋設されていた。埋甕の土坑は、長軸62cm、短軸53cmの、南北方向に長い洋梨形である。近くからは16の石棒の断片が出土した。住居の埋土は2層からなり、上層は暗褐色の砂質土で、下層は黄褐色砂質土を主体とする。出土遺物は住居としては意外に少なく、前述の埋甕の深鉢と石棒以外に縄文土器が少し出土しただけである。



第10図 SI01・SK15平面図・断面図



第11図 D地点全体図

SK15は前述したようにSI01と重複する。その新旧関係を遺構どうしの切り合いで確認したわけではないが、遺物の帰属時期から、SK15がSI01の壁の一部を壊して掘り込まれているものと考えた。土坑の平面形は南北方向に長い楕円形で、長軸1.08m、短軸0.76m、深さは確認面から45cmほどになる。出土遺物としては、比較的遺存状態のよい平安時代の土師器壺17が東壁近くから1点出土したので、その時期の所産の土坑と考えられる。

SD34は、D地点でもっと多くの土器類が出土した溝である。調査区の東半分を南北に走行するが、南側についてはSD32と重複してから先は不明である。また北側についても調査区より先は不明である。しかし23C-39から比較的遺存状態のよい土師器壺が出土しており、それがSD34で出土している土器群の時期とほぼ重なり、しかもその地点がSD34の延長線上にもあたることから、SD34はあるいはそのあたりまでは続いているのかもしれない。SD34のD地点での総延長は25mほどで、わずかに蛇行しながら南北に走行し、24C-09・19でS D33が取り付いている。溝の幅はもっとも広いところで1m、狭いところでは60cmほどになる。深さは深いところでも20cmほどしかない。土器類のほとんどを一括して取り上げているために出土地点は把握できないが、おもに24C-19として取り上げている資料が多いので、SD33と合流する地点を中心に出土したようである。また溝の中央部付近では、上層に貝がブロック状に堆積していた。貝類はとくに細かな集計等は実施していないが、種類としてはハマグリ・アサリ・イボキサゴ・カキなどがあり、いわゆる「茂原貝層」で産出する貝種と同一である。もっとも多かったのがイボキサゴで、ついでアサリ、ハマグリの順で、カキはごくわずかな出土にとどまる。ハマグリは殻長が8cmを超える大型のものもあった。なおもっとも北側の貝ブロックはSD37と重複する部分にあり、そこで貝ブロックが南北に分断されたようになっている。SD37を開削した際にSD34の貝ブロックの一部が失われた可能性がある。また溝の南半部では、数基の土坑と重複しているが、とくに出土遺物もなく、SD34との新旧関係については不明である。

SD35は平面上ではSD34から分岐している。SD34と交差してからは、SD34と1mほどの間隔をあけてほぼ平行に走行し、SD32に到達する直前で立ち上がっている。溝の幅は70cm~80cmで、深さは確認面から25cm~30cmである。出土遺物はとくなく、溝の時期を決定できる材料は少ないが、交差地点から北側はSD34と同化してしまうので、そうした位置関係を重視すれば、SD33をSD34と一連の溝と考えることもできる。

SD36は調査区の東北隅を南北に走る溝で、走行方向はSD35とほぼ平行する。溝の南側は調査区域外に延びている。溝の幅は1.5mほどあり、深さは確認面から45cmほどである。溝の南端近くから、16の平安時代の土師器壺が出土した。以上を踏まえてSD36も、SD34とほぼ同時期の溝と考えられる。

なおD地点のさらに南には、飛行機を爆撃から守るために掩体壕が2基所在する。これは昭和16年に茂原市東郷地区に海軍飛行場の建設が決定され、通常「茂原飛行場」と呼ばれている茂原海軍航空隊の関連施設である。飛行場そのものは阿久川を挟んだ対岸に建設され、現三井化学茂原工場（旧東洋高圧工業）東側の南北に延びる直線道路がかつての滑走路で、その誘導路も現在道路として今も残っている。また航空隊の本部や兵舎などの施設関係が阿久川の西側に設置された。D地点南側の2基の掩体壕周辺の調査では、梁行1間の掘立柱建物や確認トレンチでみつかった大谷石の列石などは、そうした施設と何らかの関係があるのかもしれない。

第2節 遺物

出土遺物の大半を土器類がしめており、縄文時代から奈良・平安時代までかなりの時間幅をもって出土している。土器類だけでテン箱（54cm×33cm×15cm）の総数はおよそ30箱ほどになる。それ以外には石器類、中国産磁器、土錘・鶴羽口等の土製品、瓦類などがある。また自然遺物としては、D地点のSD34から2枚貝がテン箱（54cm×33cm×15cm）で2箱分出土している。以下では遺物の種別に従って解説しておく。なお個々の遺物については、出土構・出土地点の別なく遺物の種別ごとに通し番号を付し、土器類については時代ごとの通し番号を付してある。

1 土器類

A 縄文時代（第13・14図、図版12～14）

SI01出土土器（第13図1～8、図版12）

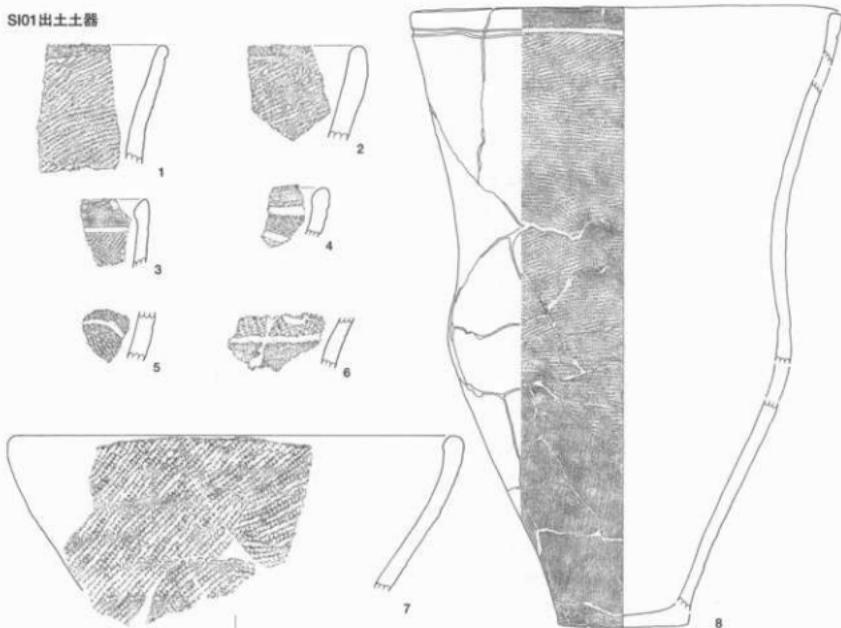
住居全体の約半分も調査できなかったので、必ずしも土器の出土量は多くないが、それを差し引いても土器の出土量は少ない。やや大型の無文の深鉢土器を除いては、図示できるものは、できるだけ図示した。

1～4は鉢形土器の口縁部が残る資料である。1は口縁部が逆ハの字状に開き、下半で少し括れる。口縁端部はやや外側に折り返し、それ以下に単節Lの縄文を施している。内面はミガキにも近いヘラ削り調整を行っている。硬質な焼き上がりである。2の口縁端部は逆U字状で、それ以下に無節Lの縄文を施す。胎土に細かい砂粒が多く含んでいる。3は外面に横方向の沈線を巡し、それ以下に細かい単節Lの縄文を施す。内側は口縁端部近くで一端やや肉厚になる。入念なヘラミガキを行っており、光沢がある。4の口縁部の作りは3と同じである。外面には2本の沈線がみえ、その間に細かい単節Lの縄文を充填している。器面の調整は3よりも粗い。5は円弧の沈線のなかに縄文を施した、鉢の体部の資料である。6は小型深鉢土器の体部だけが残る資料で、横位の沈線と小さな円弧の沈線を観察できる。横位の沈線より上に単節Rの縄文を施す。7は体部上半がやや丸みをもって強く外反する鉢形土器で、下端でやや括れる。外面は単節Lだけの縄文で構成されており、施文は口縁端部まで及ぶ。内側は口縁端部でやや肉厚になる。粗いミガキを行っている。胎土には白色針状物質と雲母粒を多く含む、比較的精製された胎土である。8は埋甕に正位で埋設されていた深鉢である。口縁から底部まで残っているが、体部下半には欠損箇所も多い。埋甕の遺存状態としては、やや奇異な印象を受けるが、あるいは砂地という軟弱な基盤に敷設されていたために破片資料の一部が砂地にめり込み、それらをすべて回収できなかった可能性もある。口径50.5cm、器高48.6cmで、体部上半が逆ハの字状に直線的に開き、体部下半が一端張り出す。括れの度合いがやや弱いキャリバー形である。加曾利E IV式系譜の粗製土器で、称名寺I式段階に相当する土器である。平縁の口縁端部は平坦で、断面はやや丸みを帯びた箱形になっている。口縁部の作りもさほど肥厚せずにまっすぐに立ち上がり、縄文時代後期初頭段階の特徴をそなえている。口縁部にはしっかりと1条の沈線を巡り、それ以下に細かい単節Lの縄文を施す。底部近くは縦方向に磨いている。内面はやや横方向のミガキを行っている。胎土には細かい砂粒を多く含み、とくに光沢のある黒色粒の含有が目立つ。体部上半は被熱で全体にかなり焼けているものの、器面はさほど荒れていない。

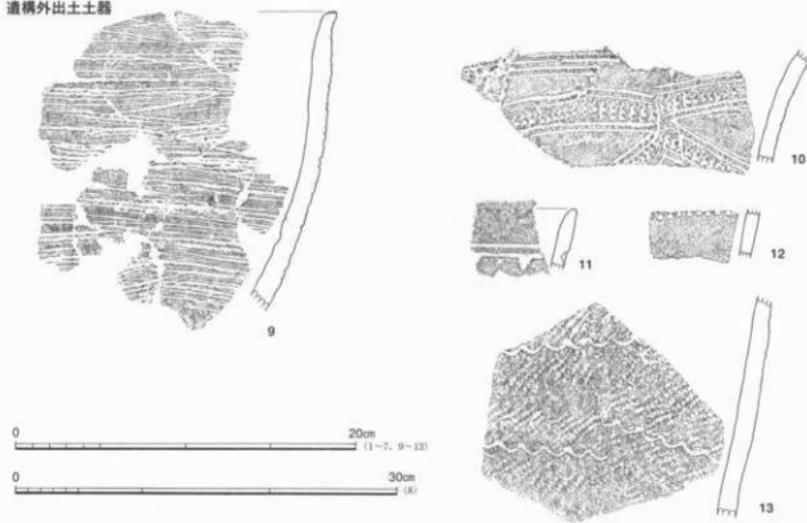
その他の出土土器（第13・14図9～19、図版13・14）

今回の南北に長い調査地のなかではほぼ全域にわたって縄文土器が出土しているが、密度からいえば南北約3分の1ほどの下流域側に比較的集中している。とりわけD地点で出土量の多いのが目立つ。以下に主

SI01出土土器



造構外出土土器



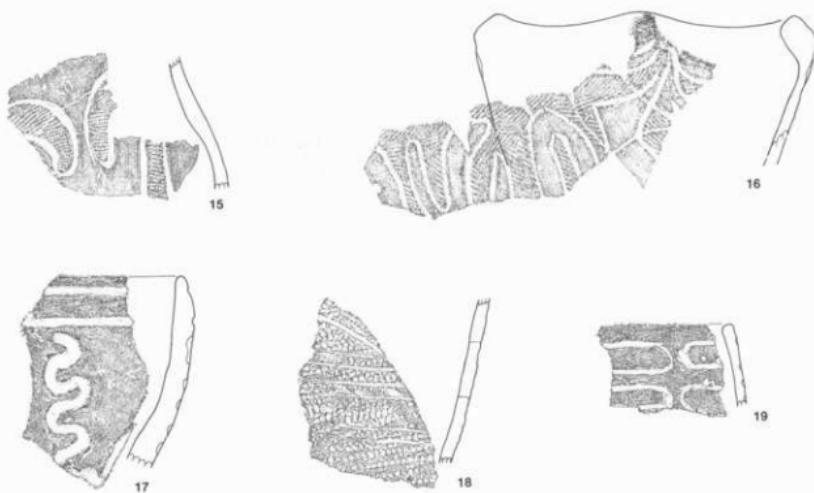
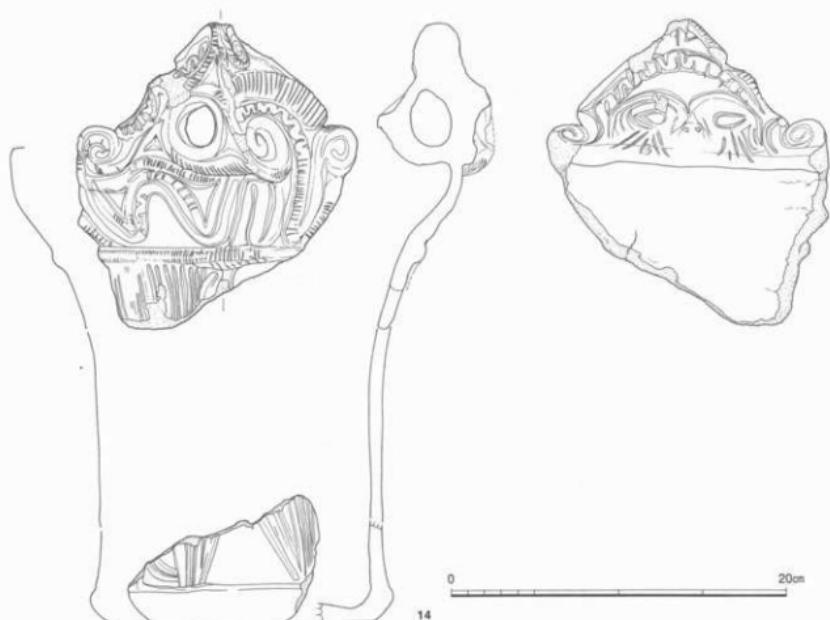
第12図 純文時代の土器（1）

だった出土資料を中心に、時期の古いものから説明しておく。

9は口縁端部がわずかに残る深鉢である。口縁端部に刻みをもつ。体部は上半まではかなり直線的な立ち上がりで、下半部からはやや丸みをもってすぼまっていくようである。体部に横あるいはやや斜めに平行沈線文を密に施す。前期後半の浮島式である。SD36から出土した。10は深鉢の体部だけが残る資料である。体部の文様は逆三角形を基本モチーフに磨消貝殻文を主体とする。文様の輪郭を2重の半截竹管による平行沈線文で区画し、その間を貝殻腹縁文で埋めて、逆三角形の部分は無地のまま残している。胎土に粒径2mmほどの赤色粒を少し含む。浮島式に続く前期後半の興津式である。53トレンチから出土した。11・12は中期初頭の五領ヶ台式で、胎土に長石粒と雲母粒を多く含んでいる。11は口縁部が断面三角形で、口縁部に2条の浅い沈線があり、その下に2段互い違いに三角印刻文を施す。印刻文は先端部が三角形になった施文工具を斜めに挿して、そのまま生地から工具を引き上げて彫り上げたものである。12は横位の細かい刺突文がみられる。いずれも9トレンチから出土した。13は単節しの繩文を施文し、繩文原体の末端がS字状に現れている。胎土には粒径1.0mm～2.0mmの砂粒を非常に多く含み、雲母粒を少し含む。特徴的な文様はないが、中期初頭の土器である。24D-61から出土した。

14は口縁部から突出した把手の内側に人面を装飾文様として付加した、顔面把手をもつ土器である。体部中位の資料を欠いているので、図上での位置関係は推定でしかないが、体部上半は逆ハの字状に開き、それ以下は円筒型になって底部に至るものと思われる。底部はいわゆる屈折底で、底面は真っ平らに成形されている。把手部分は半球状に中空になっており、その分把手全体が内外に盛り上がっている。外側の1か所に円形の孔があき、その対象位置には渦巻文を置き、その円周に沿って交互刺突文がある。途中で文様を刻み文に変えながら、一端体部中位まで垂れ下がってから口縁部に折り返り、小さな渦巻文となって収束している。把手の上部は山状に突出し、右側面には渦巻文、左側には兩粒状の区画に交互刺突文を施文している。体部上半は口縁部の渦巻文から出発するW字状の流れを交互刺突文と刻み文を並べて表し、その下端を横位の刻み文で区画している。これらの文様は幅広の隆帯を基調としているが、体部下半では縱方向の集合沈線文が基調となる。そして把手の内側は、人面を目・鼻で表現しており、口を表現した痕跡は確認できない。目はやや吊り上がった切れ長の目を沈線で表現しており、その上には眉毛状の隆帯が鼻先まで続く。鼻は2個の刺突で鼻の孔を表している。両目の下には数条の沈線で逆扇形の跡を表現している。顔面部の上部はアーチ状に交互刺突文が巡り、その両端は外側の渦巻文と表裏の関係になる渦巻文となって文様が完結している。この両端の渦巻文は耳の位置ともみれるので、あるいは耳飾りを表しているのかもしれない。以上から中期中葉の勝板式期の後半段階で、藤内II式段階から井戸尻I式にかけての所産と考えられるが、前者の所産である可能性が高いと思われる。なお県内でこの種の資料としては初出の資料と思われる。B地点の南端近くに散乱して出土した。

15・16は後期初頭の称名寺1式の深鉢土器である。15は体部だけの資料で、蕨状の逆J字文が対面するように沈線でレイアウトした文様構成である。文様内部には細かい繩文を施文する。薄手で、硬質に仕上がっている。SD16から出土した。16は波状口縁で、山部の突起が内部にかなり突出している。体部の文様も山部の突起を意識しながら、J字文を基本モチーフにして沈線で複雑な文様を描いているが、資料が横長に遺存したものなので文様の連続性まではとらえられない。沈線の内部には繩文を施文する。文様の複雑さから15よりも後出する段階のものであろう。SD34から出土した。17は口縁部に2条の幅広の沈線が巡り、その下から縱方向に蛇行する沈線を描出している。肉厚で、胎土には黒色粒や雲母粒を多く含む。堀



第13図 縄文時代の土器（2）

之内1式である。12トレンチから出土した。18は粗製の後期中葉の加曾利B式の深鉢土器である。単節縄文を地文として、その上に矢羽根状の平行沈線文を加えている。薄手で、内面には粘土紐の継ぎ目を残している。出土地点は不明である。19は直径11cmほどの小型の鉢で、口縁部直下に2段の円圏文を沈線で描いている。器面はミガキで光沢があるが、内面はとくに磨いた形跡はない。晩期前葉の安行3b式の資料である。

B 古墳時代（第14～17図、図版10・11）

当該期の遺構はSK23・SK27だけで、遺構に伴う出土資料も極めて少ない。図示した資料の大半は遺物集中地点として調査した範囲からまとまって出土したもので、古墳時代でも前期を中心としている。以下では調査地点に含まれる遺構出土のものも含め、A・B・Cの地点順に出土遺物を解説していくこととする。

A 地点出土土器（第14図1～10、図版10・11）

土器は巨視的にみると、調査地点の南北に分かれて出土している。また一部の資料は、地山が川に向かって傾斜している部分からも出土している。器種は大型のものから小型のものまであるが、土器片の全出土量に比べれば、個体を窺える資料があまりなく、図示できた資料は少ない。

1・2は壺の口縁部だけが残る資料である。1は口唇端部をつまみ上げて、受け口状の口唇部を作り出しているのが特徴である。頭部のわずかな遺存状態からみると、かなり強い角度で屈曲して体部になるようである。内外面とも刷毛目調整後にヘラミガキを行っている。2は二重口縁壺で、口縁部中段にかなりはっきりした稜がある。稜より上は緩やかに外反しながら開いている。胎土に砂粒を多く含み、器面がざらつき、一部は被熱のために灰色化している。3は口縁部はほぼ直線的に外反する、折り返し口縁壺の体部上半の資料である。体部はかなり丸みをもち体部最大径が30cm前後になるやや大型の壺になる。外面はミガキ調整を施しているが、器面が荒れているために不鮮明になっている。胎土には粒径1.0mm～3.0mmの赤色粒を多く含み、白色針状物質も少し含む。4はやや長胴型の小型の部類の壺で、外面は磨いて平滑に仕上げてある。5は全面に刷毛目調整を施し、体部下半だけ刷毛目調整後にヘラ削りを行っている。中型の壺である。完形に近い。口縁部はくの字状に外反し、内側には外面同様に刷毛目調整を行っている。体部は緩やかな丸みをもち、体部最大径が器高の中程よりやや下にあり、その分底面径も大きく、また厚手な作りなこともあって、安定感・重量感のある壺である。胎土に白色系の砂粒を多く含む。6は口縁部が短く外反する椀である。推定口径は15.6cmで、器高はおそらく12cm前後になると思われる。内面に赤色塗彩を施している。胎土は砂粒が多く、粒径1.0mmほどの赤色粒を少し含む。7は欠損部はあるものの、全体のわかる資料である。広口の壺で、口縁部は直線的にくの字状に立ち上がり、最大径は体部中位にある。体部下半をヘラ削りしている以外は、刷毛目調整後に丹念なミガキ調整を行っており、そのミガキ調整の範囲に重なるように赤色塗彩を施している。ただ器面が擦れたために塗彩痕跡が剥落している部分が多い。底部外面はやや上げ底気味になっている。8は小型の高壺の脚部である。脚部外面は磨いているが、工具で器面を押しつぶすように磨いている。9は台付壺の脚部だけが残る資料で、外面の調整は粗く平滑ではない。10は高壺脚部の資料である。ハの字状に開くが、下半がやや外側に膨らむ。透し孔は3孔ある。外面は刷毛目調整後に粗いミガキ調整を行っている。内面はヘラナデで仕上げてある。壺部内面と脚部外面に赤色塗彩を施してある。胎土には砂粒を多く含んでいる。なお図示できなかったが、厚みが1cmほどで、断

A地点出土土器



第14図 古墳時代の土器（1）

面にはほとんど曲率がない同一個体と思われる破片資料がかなりあった。破片の曲率からすると、相当大型な壺になると思われるが、部位を特定できる資料がまったくなかったので全体像は不明である。

B地点出土土器（第15～17図1～45、図版10・11）

狭い調査地点にもかかわらず、かなり大量の土器片が出土した。出土地点を押さえた土器片だけでも1,800点近くにものぼる。やや大型の破片は微高地の縁辺に沿って出土する傾向がある。接合状況をみるとかなり離れた地点で出土したものどうしでも接合している例もあり、土器がかなり散乱して出土した状況が窺える。

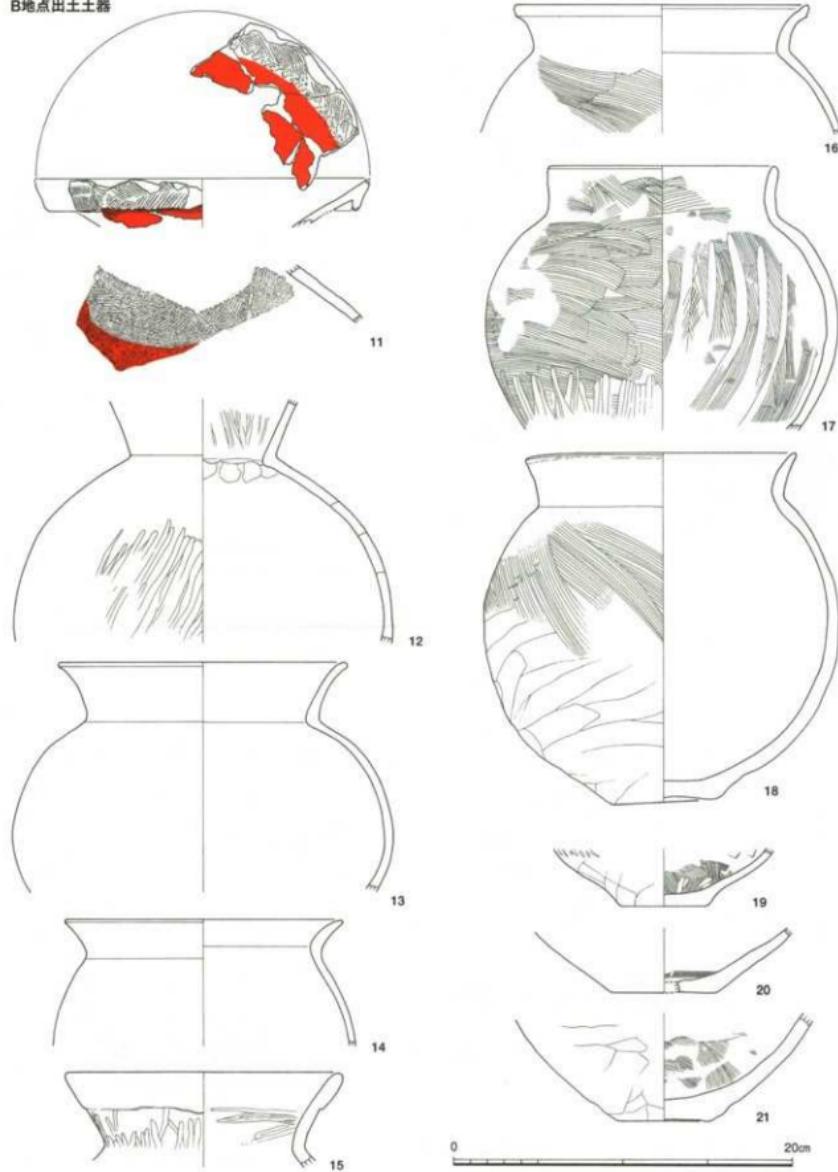
11は折り返し口縁の壺の肩より上の資料である。口縁部には単節LR・RLの羽状繩文を施し、下端に単節繩文の押捺を加えている。なお口縁端部は欠失しているために、同様の押捺があったのかどうか不明である。口縁部直下には縦方向の刷毛目調整痕跡が残り、口縁部下端以下に赤色塗彩を施す。口縁部内側

は2条1組のS字状結節文に区画された单節RLの繩文帯が巡り、施文部以下に赤色塗彩を施す。肩部付近の資料では单節斜繩文LRを施文後に、繩文帯の上下に1単位9本の櫛描文を施している。ただし他の同一個体と思われる資料も総合すると、櫛描文帯は最低でも4段あり、間には少なくとも1段の無文帯が存在する。赤色塗彩はその無文帯以下に施されている。12・13は球胴状の壺である。12は外面にミガキを施し、その後に赤色塗彩を施している。他の同一個体と思われる資料には、ミガキ調整の前段階に行なった刷毛目調整痕を確認できる資料もある。内面には口縁部との接合部に指頭圧痕が残り、それより上に赤色塗彩を施す。胎土はきめが細かく、粒径1.0mm～3.0mmの赤色粒を少し含む。13は口縁部が緩やかに外反しながら立ち上がる。器面は調整痕跡をほとんど残さないほど平滑に磨かれており、手触りがすべすべしている。14はやや長胴型の壺で、薄手の作りである。口縁部の内外をヨコナデしている以外には、調整痕跡は不明瞭である。外面は全体に煤けている。15は折り返し口縁の壺である。折り返し端部が部分的に口縁部に同化し、段差が不明瞭になっている。器面全体を磨いているようだが、被熱のためもあって器面がかなり荒れていって、調整痕跡は不鮮明である。胎土には細かい砂粒を多く含み、ざらついている。

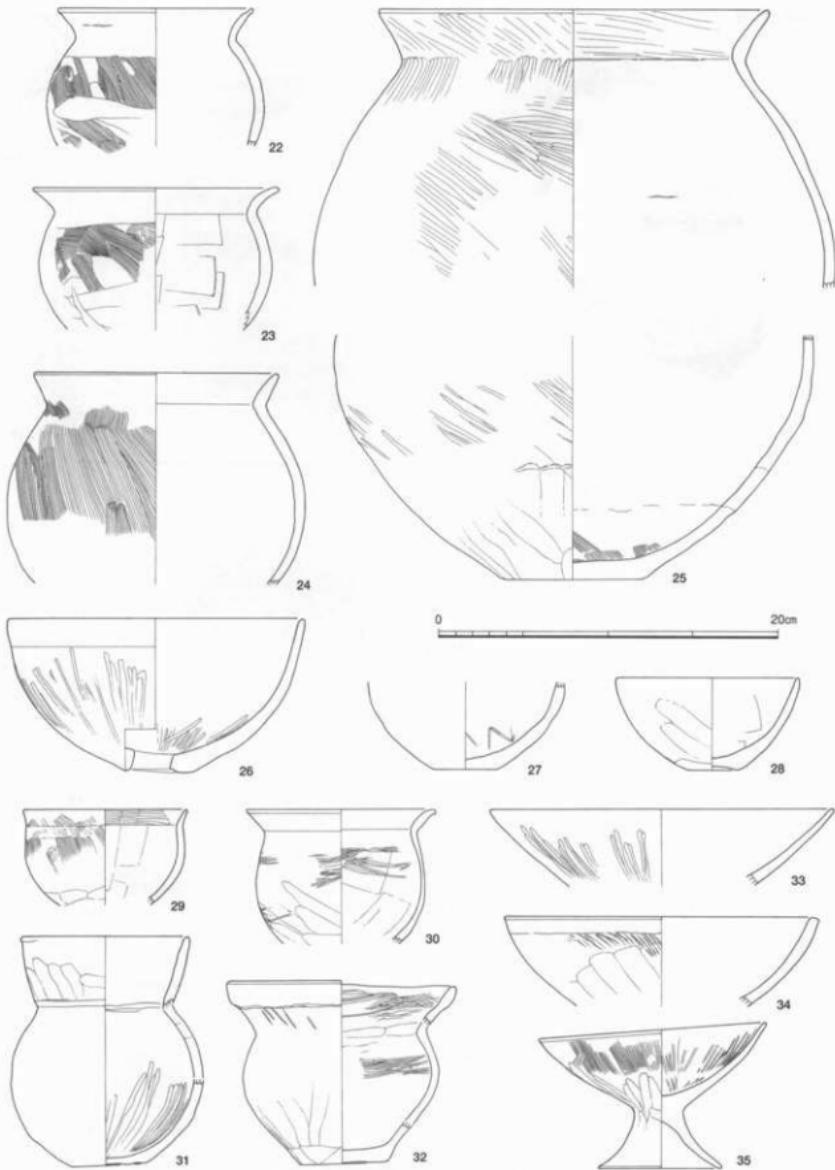
16～18は体部に刷毛目調整が残る資料である。16は口縁部が湾曲して外反する。口縁端部はつまみ上げて面を作り出し、内面には受け口の段がある。端部の断面はやや丸みのある三角形をしている。形態的には、いわゆる北陸系といわれる壺に該当するかもしれない。17は肉厚な口縁部の作りで、緩やかに外反しながら立ち上がっている。外面の体部下半は刷毛目調整後にミガキを行なっており、内面ではさらに高い位置から磨いている。緻密な胎土で、やや硬質な焼き上がりである。18は最大径が器高の中程にあり、体部はやや球胴に近い器形である。口縁部はやや外反する。体部上半を刷毛目で調整し、下半をヘラ削り調整している。被熱のために器面全体が荒れしており、一部には煤も付着し、色調もかなり赤みを帯びている。底部は上げ底氣味で、その周縁は擦れて平坦になっている。胎土は砂粒を多く含み、ざらつく。19～21は内面に刷毛目を残す、壺底部の資料である。19は底面のすぐ上で括れ、内面は入念な刷毛目調整が確認できる。遺存している上端にはわずかだが赤色塗彩らしい痕跡も残り、器種としてはあるいは壺というほうが適当なのかもしれない。20・21では底部からほぼ直線的に体部が開き、最大径がかなり大きい壺を想像させる。21は生地を搔き取るように粗くヘラ削りしているために、器面に凹凸が残る。底面は18同様、周縁が擦れ平坦になっている。22～24は刷毛目を残す中型の壺である。22では最大径が体部中程にあるのにたいして、23では口縁端部に最大径があり、口縁部の反り返りも強い。24は器形としては22に近いが、それよりもやや大型である。体部下半はヘラ削りを行なっている。胎土には粒径1.0mm～3.0mmの赤色粒と雲母粒を少し含む。25は今回の出土資料のなかでは大型の部類に属す壺である。体部最大径が推定31cm、口縁部径が推定23cmになる。図では上下で直接接合する部分がなかったために分割して図示した。ただし土器自体のゆがみや、壺の上下で一帯となる部分を図化できなかったために、図上では土器の上・下半部が連続していない。口縁部から頸部にかけて粗い刷毛目で調整し、それ以下を幅が広いミガキで調整し、底部近くをヘラ削りで調整している。内面は底部近くに刷毛目調整が残る。体部下半部は被熱のために一部変色し、焼けた部分が多い。胎土には粒径1.0mm～4.0mmの白色系鉱物を多く含み、胎土自体にやや髪がある。

26はいわゆる单孔の鉢のはば完全な形のもので、伏せた状態で出土した。口縁部径は17.4cm、器高は9.0cmになる。体部はポール状に緩やかな曲線を描き、体部上半をかなり薄手に仕上げてある。口縁部は内外をヨコナデし、体部は内外とも粗いミガキ調整を行なっている。底部は平底に作り、その中央にヘラで削って、焼成前の長円形の孔を1個穿っている。一部に被熱した痕跡が顯著である。27は内面の調整からいえ

B地点出土土器



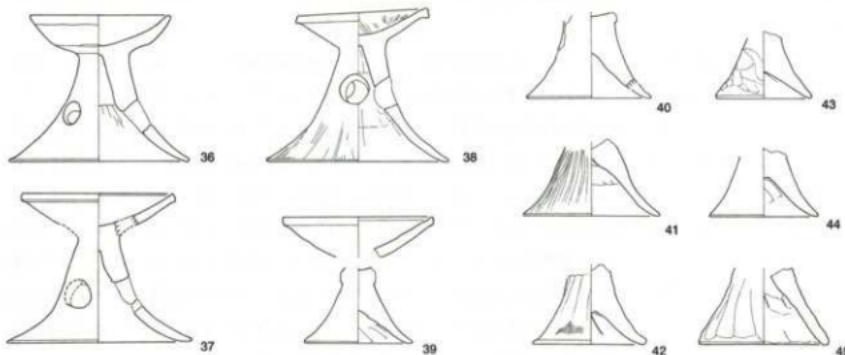
第15図 古墳時代の土器（2）



第16図 古墳時代の土器（3）

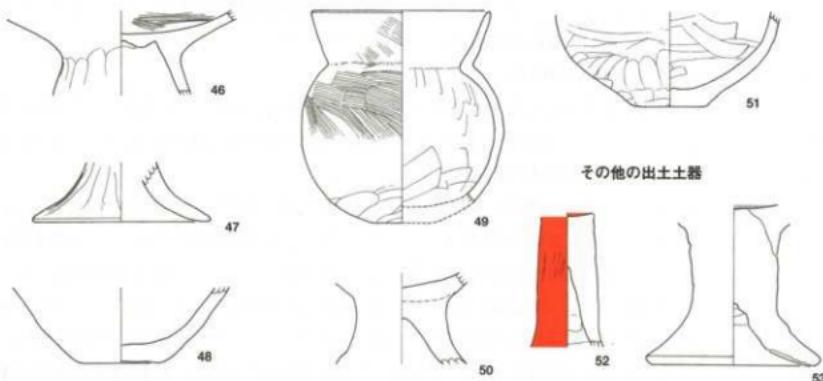
ば、中型になる壺の下半部の資料であろうか。底部は平底である。全体に被熱ために器面が荒れている。胎土に細かい砂粒を多く含んでいる。

28は体部がやや丸みをもちながら逆ハの字状に開く小型の鉢である。体部にはほとんど調整痕跡を残していない。わずかにヘラ削りのような痕跡が確認できるだけである。底面はかなり上げ底に作っている。全体に薄手の作りである。29・30は最大径が口縁部にある、小型の壺である。29は口縁部がくの字状に外反する。体部下半をヘラ削りし、それより上に刷毛目調整を加えている。30は口縁端部を面取りし、体部下半をヘラ削り、それより上にミガキ調整を加えている。比較的緻密な胎土である。31・32はやや小型の壺である。31は口縁部がやや直立気味にくの字状に開く。体部との境を線状にナデているために沈線状になり、そこでわずかに括れができる。体部はかなり丸みをもち、最大径がその中位にある。底面は平底である。全体に被熱の痕跡が顕著で変色し器面が荒れて、外面にはほとんど調整痕跡が残っていない。



C地点出土土器
(SK23)

0 20cm



他の出土土器

第17図 古墳時代の土器 (4)

わずかに口縁部にヘラナデの痕跡が残る程度である。内面は粗いミガキ調整を行っている。胎土に白色系の砂粒を多く含む。32は折り返し口縁で、最大径が口縁部にあり、頸部で括れて体部がやや張り出している。体部下半はヘラ削りし、内面は細かいミガキ調整を施している。胎土には粒径1.0mmほどの赤色系鉱物を多く含んでいる。全体の色調は灰色系（浅黄色）である。

33～35は高坏である。33・34は坏部のみで、33は坏部が逆ハの字に直線的に開く。推定口径は20.3cmになる。端部にいくにつれ薄手に作っている。全体に粗いミガキ調整を行って仕上げている。34はやや湾曲する坏部で、比較的厚手の作りである。口縁端部は面取をし、断面は箱形に近い。外面は刷毛目調整後にヘラ削りを行い、内面はナデで平滑に仕上げてある。磨いた痕跡はない。胎土には粒径1.0mm～3.0mmの白・赤色系鉱物を多く含む。35は口径13.2cm、器高8.3cmで、やや小型な高坏で、全体に薄手に仕上げてある。坏部の形状は34に似るが、口縁端部はかなり薄手である。坏部外面の下半にヘラ削りを行い、それより上部には刷毛目調整痕が残る。脚部外面と坏部内面にミガキを施すが光沢はなく、黒い筋になって残っているだけである。

36～38は貫通孔のない器台で、いずれも脚部は内湾しながらハの字状に開き、透し孔は3孔ある。36はほぼ完形で、26の鉢とともに出土した。器受部は浅い碗状で、外面は下半をヘラ削りすることによって、稜を作り出している。器面は最終的には磨いて整えているが、ミガキ痕跡は不明瞭だが器面を工具でこすりつけるような調整方法かもしれない。37は器受部端面を面取する。なお調整痕跡については器面が擦れて不明瞭になっている。38は脚部の高さに比べて器受部の高さが低く、重心が高い印象を受ける。器受部端面は面取し、内外面を放射状に磨いている。ただし器面に光沢を残すようなミガキ痕跡ではない。脚部外面は磨いて、内面はヘラナデで調整している。39は器受部と脚部は直接接合しないが、同一個体の可能性がある小型の器台である。器受部端面を面取する。脚部は内湾しながらハの字状に開いている。なお図示した資料はすべて貫通孔がないが、小破片のために図示できなかった資料のなかには、器台の貫通孔部分の破片資料や、高坏を再利用して器台としたと考えられる破片資料もあった。

40～45は小型の高坏で、脚部だけが残る資料である。いずれも脚部は内湾しながらハの字状に開く形態で、透し孔はない。40・42に坏部の底面が残っている。41では脚部の頂部をくぼめて坏部を接合しているのがわかる。脚部の天井部を高くとっているのが41で、それ以外はかなり厚みがある。なお坏部の破片資料もそれなりに出土しているが、遺存状態が悪く、図示できなかった。

C地点出土土器（第17図46～50、図版10）

C地点では土器は集中して出土したもの、集中の度合いもA・B地点に比べると散漫で、しかも年代差のある資料も混在している。古墳時代の一括資料としてはSK23から出土したものが唯一で、ここではそれ以外の古墳時代の出土資料もあわせて報告する。

46～48がSK23から出土したものである。SK23で出土地点を押さえて取り上げた破片資料だけでも100点前後あったが、小破片でしかも壺類が多いこともあって、図示できたものは非常に少ない。3点を図示した。46は高坏の坏部と脚部との接合部を残す資料である。薄手の作りで、かなり硬質に焼き上がっていいる。坏部内面はミガキ調整を施し、黒色処理を行っている。脚部天井部を大きく平らに作り、内径で3.5cmほどある。47は高坏の脚部で、裾はかなり内湾しながらハの字状に開く。器面に被熱した痕跡があり、器面が荒れている。48は壺底部の資料だが、とくに被熱した痕跡は見あたらない。胎土に砂粒を非常に多く含んでいる。なお壺類を図示できなかったが、破片資料のほとんどは黒色処理した須恵器坏模倣坏で、

一部にはかなり扁平気味な作りを思わせる資料もあった。なお赤色塗彩を施したものは確認できなかった。

49は口縁部が逆ハの字状に開き、体部が球胴状になる小型の壺である。最大径は体部の中位にある。口縁部の内外をヨコナデし、体部上半まで刷毛目調整を行い、それ以下をヘラ削りしている。内面にはヘラナデの痕跡が残る。底面は小さく、体部との境をあまりはっきり作り出していないのが特徴である。緻密な胎土を使用している。2トレンチのSD43部分から出土した。50は高壺の坏部と脚部との接合部が残る資料である。坏部底面は平滑に仕上げておらず、坏部外面はヘラ削りを行っている。脚部はかなり角度をもって内湾しながらハの字状に開くので、脚部はさほど高くならないと思われる。3トレンチから出土した。51は、球胴の壺と思われるものの、底部近くの資料である。

その他の出土土器（第17図51～54、図版10）

土器集中地点や遺構の一括資料としてそぐわないと思われる資料の一群を掲載する。52はB地点で出土した高壺脚部である。脚の上下ではほとんど径に差がない柱状の脚部である。坏部底面と脚部外面に赤色塗彩を施す。坏部はかなり薄く作られている。B地点の他の土器類よりも、新しくなる可能性もあるので、B地点出土土器から除外した。53はD地点で出土した高壺の脚部である。円柱状の脚部から短い裾部が延びる。肉厚な作りで、脚内部は中空部分が少なく、粗製的な印象を受ける。坏部内面に黒色処理を行っている。7世紀前半に散見する高壺に類似するので、そうした年代のなかでとらえておきたい。

C 奈良・平安時代（第18図1～14、図版11）

資料の大半はD地点のSD34出土のものに集中し、D地点以北では非常に少ない傾向にある。坏類はいずれもいわゆるロクロ土師器で、今回報告する資料のなかにはロクロ未使用の坏類はなかった。

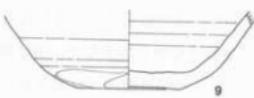
C地点出土土器（第18図1～2）

1は千葉市域産の須恵器坏で、底部だけが残る資料である。底部の切り離しは回転ヘラ削りで、体部は底部近くを回転ヘラ削りしている。体部はほぼ直線的に開き、底径は7.5cmほどになる。胎土に白色砂粒を多く含み、細かい赤色粒を少し含む。器面の色調は灰褐色で、断面は橙色になっている。2は体部が50°ほどの傾きで直線的に開く土師器坏である。口径推定で11.6cmになる。小破片のために図示しなかったが、C地点では他に縁釉碗の破片も出土している。

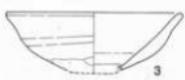
D地点出土土器（第18図3～17、図版11）

3～13がSD34の出土土器で、坏類が大半をしめる。3は今回の出土資料のなかではもっとも小型の土師器坏である。底部を欠損している。推定口径10.2cm、推定高3.6cmで、底部近くを手持ちヘラ削りで調整している。白色砂粒を多く含む。4は体部にやや丸みをもちらながら逆ハの字状に立ち上がる。口径に比べて底径がかなり小さくなる。底部近くを手持ちでヘラ削りし、底面もヘラで削っている。内面にはロクロ目を強く残している。5・6・7・9は体部がおよそ50°前後の傾きで、いくぶん丸みをもちらながら逆ハの字状に開く。5はそのなかでは、体部はかなり直線的に開く。底部近くを手持ちのヘラ削りで調整し、底面は回転糸切り後にヘラ削り調整している。6はほぼ完形で口径13.8cm、器高4.4cmになる。底面は回転糸切り後、無調整である。胎土には粒径1.0mm～4.0mmの赤色粒を少し含む。7は体部側面に波状の文様を、下から上にヘラ描きしている。工具は断面が長方形に近いもので、工具先端のアタリを変えながら描いている。底面は外縁部分しか残っていないが、その範囲では手持ちのヘラ削りを行っている。9は回転糸切りで切り離した後に、ヘラ削り調整している。胎土に砂粒を多く含み、ざらついている。8は体部が60°ほどの角度で立ち上がる。底面は回転糸切り後、無調整である。かなり硬質な焼き上がりである。10は壺形碗

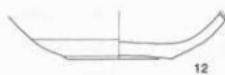
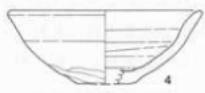
C地点出土土器



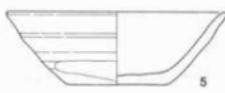
D地点出土土器



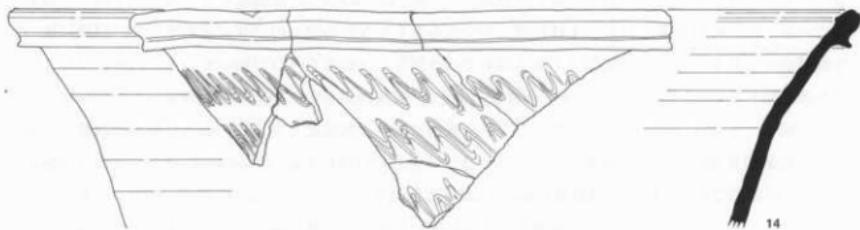
(23C-59)



(SD36)



(SK15)



第18図 奈良・平安時代の土器

を模倣した高台付椀である。内面は入念なミガキを施して、黒色処理を行っている。高台部はやや肉厚な作りである。なお出土資料の中には、黒色処理を行っていない高台付椀の破片資料も存在する。11は推定口径14.2cm、推定器高2.5cmの皿である。12は体部がかなり丸みをもって立ち上がる坏で、底面の内外に焼成後に先端部が針状になった工具で「×」のヘラ描きをしている。底部は糸切り後、無調整である。かなり硬質な焼き上がりである。13は長胴壺の体部上半の資料である。口縁部の立ち上がりは短く、端部は面取をしてある。体部はヘラ削り調整である。

14は口径が推定で50.5cmある、須恵器大壺の口縁部の資料である。口唇部の内外に断面三角形の突帯を挽き出し、外側は高くはっきりしている。内側は端部よりやや突出する程度だが、何らかの意図で突帯を挽き出しているとすれば、口縁端部より1cmほど下がった位置に突帯があることから、あるいは蓋を受けるためのものかもしれない。外面には少なくとも3段の緩慢な印象を受ける櫛描き波状文を施す。胎土に白色の砂粒を多く含み、さほど緻密ではない。色調は器面が灰色で、断面ではサンドイッチ状になっており、芯が灰色でそれを挟んでにぶい橙色である。図示した以外に肩部の破片資料もあるが、それでは叩き目や内面の調整痕跡とも確認できない。胎土・色調はいわゆる千葉市域産の須恵器に近く、とくに頸部の波状文は中原・宇津志野窯の製品にもみられるものである。ただ口縁部内側の突帯は特徴的なもので、今のところ唯一中原窯の15トレンチ出土のものに類似があるので¹¹、中原窯の製品になる可能性は高い。

15は体部がおよそ50°前後でやや丸みをもって開く坏である。底面は回転糸切り後無調整である。なおこの資料は23C-39出土だが、遺存状態が2分の1ほどと比較的よい。しかもグリッドの位置がSD34の延長部分に相当し、形態的にもSD34出土土器と共通する。SD34が直線的に延びるのであれば、この資料をSD34出土としてもよいかもしれない。16はSD36出土の坏で、体部が60°ほどの角度をもって開く。底部近くはヘラ削りをしている。17はSK15出土の坏で、ほぼ完形に近い。口径13.5cm、底径6.8cm、器高4.2cmで、底面は糸切り後にヘラで削っている。体部の底部近くは手持ちヘラ削りで調整している。

墨書き土器（第19図1）

1点だけ出土した。体部外面の口縁端部に、正位で「本」とあり、墨痕は比較的鮮明である。24C-48で出土した。

D 中世（第19図1・2、図版15）

明らかに中世と考えられる資料は非常に少なく、青磁碗片と常滑産の大壺の破片資料が2点あった。ここでは青磁碗だけ報告しておく。

磁器（第19図1・2、図版15）

中国産青磁碗の小片が2点出土した。いずれも龍泉窯の製品で、13世紀中頃の所産と思われる。1の釉色は青磁本來の発色で、比較的鮮やかなコバルトブルーである。器面に文様の一部らしい凹凸があるが、デザインまではとらえられない。内面に粗い貫入が少し入る。SD36から出土した。2は蓮弁文の一部が残る。釉色はかなり黄色味があり、釉は非常に薄い。細かい貫入が少し入る。28C-28で出土した。

2 土製品（第19図1～4、図版15）

1は紡錘車で、断面は逆台形である。重量は60.3gになる。C地点のSD43から出土した。2・3は大型の管状土錐で、完形の3では全長12.3cmで、重さは316.0gになる。表面には粘土塊どうしの合わせ目が細

い筋になって残っているので、製作時には直径で2cmを超える丸棒に粘土塊を巻き付けて成形し、それを手の平でのして、両端部を薄く仕上げたのである。なお両端部に欠けている部分があるが、擦痕までは確認できない。C地点3トレンチで出土した。2は3と同形とすれば、現存重量が45.6gなので、重量比でいえば3の7分の1ほどが残る管状土錐ということになる。17トレンチから出土した。4は輪の羽口で、先端に近い部分が残っている。外径は推定で7.5cm、通風口径は推定で2.5cmほどになる。外面の一部はケイ素が溶融してガラス化している。胎土には砂粒とスサを多く混入している。高熱のために全体に鬆が入っている。図では上半が灰白色、下半が灰色に変色している。

3 瓦類（第19図1～4、図版15）

散発的に瓦が出土した^o。1・2は平瓦で、1は凸面にはっきりした叩き目は確認できない。凹面には、糸切り痕と布目圧痕を確認できる。須恵質の焼き上がりである。砂粒を多く含み、凸面に離れ砂を撒いた可能性もある。11トレンチで出土した。2は凸面に平行叩き目があり、おそらく側面に近い資料と思われ、側面に平行するヘラ削り痕跡が残る。ただ凹面には布目圧痕がなく、凹面鋸面方向のナデ調整が緩やかな円弧状なので、須恵器壺の可能性もある。SD34で出土した。3・4は丸瓦で、3は凹面に布目圧痕が残り、4でははっきりした布目圧痕は確認できない。3がSD07、4が17トレンチで出土した。

4 転用砥石（第19図1～4、図版15）

破片の曲率が小さい須恵器壺を砥石に転用したものである。いずれも手の平におさまる大きさのものを素材とし、破面の1面を砥石にしている。ただし3は壺の内側も砥石に利用している。1・2・4がC地点、3がD地点で出土した。他の出土資料のなかには17世紀代の瀬戸美濃の擂鉢を砥石に転用した例もあり、1～4は素材は古代のものでも、砥石として使用した時期はかなり新しくなる可能性もある。

5 石器類（第20・21図1～16・第22図1～4、図版14）

縄文時代の石器（第20・21図）

(1) 石器の特徴 1～5は石鎚である。石材はすべて非常に透明度の高い良質の黒曜石を用いている。主要剥離面を一部残すもの（4・5）があり、石鎚の厚みが無いことから、剥片を素材としたと考えられる。大きさは、比較的大型のもの（1）、中型のもの（2～4）、小型のもの（5）があり、バラエティに富む。形態的には、いずれも全体形状が二等辺三角形で、脚部の抉れは比較的大きい。脚部の形状は、ほとんどのものがやや左右非対称であり、脚部の再生が行われた可能性がある。とくに、2は左脚部の再生加工の痕跡が顕著である。先端部の形状は、2が主軸に対しやや右側にねじれていることから、先端部の再生が行われた可能性が高い。このように、石鎚については、全体形状・石材の選択・脚部の抉りの形状・脚部の再生について共通する点が多いことから、同時期の所産である可能性が高い。

6～14は楔形石器である。石材と素材の形状から、大きく二つに分類できる。ひとつは、6・7が該当し、剥片の黒曜石を素材にして、両極剥離を行うもの。もうひとつは8～14が該当し、チャート・安山岩の円錐を素材として、両極剥離を行う。前者は、石材と素材の形状から石鎚と共通点が多いことから、おそらく同時期の所産と考えられる。後者は、自然面を大きく残し、両極剥離により、一端が尖頭状の形態を有することを特徴とする。

15は敲石である。大型の扁平な円錐を素材として、周縁部と平坦面中央部に敲打痕がみられる。平坦面は、画面とも同一方向の磨擦痕がみられる。器体の上半部と右半部は大きく破損している。

16は石棒である。軟質で非常に細粒の凝灰岩を素材としている。上下両端は、大きく破損しているが、

墨書土器



土製品



磁器



2



4

瓦類



1



2

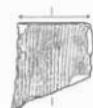


3



4

転用砥石



1



2



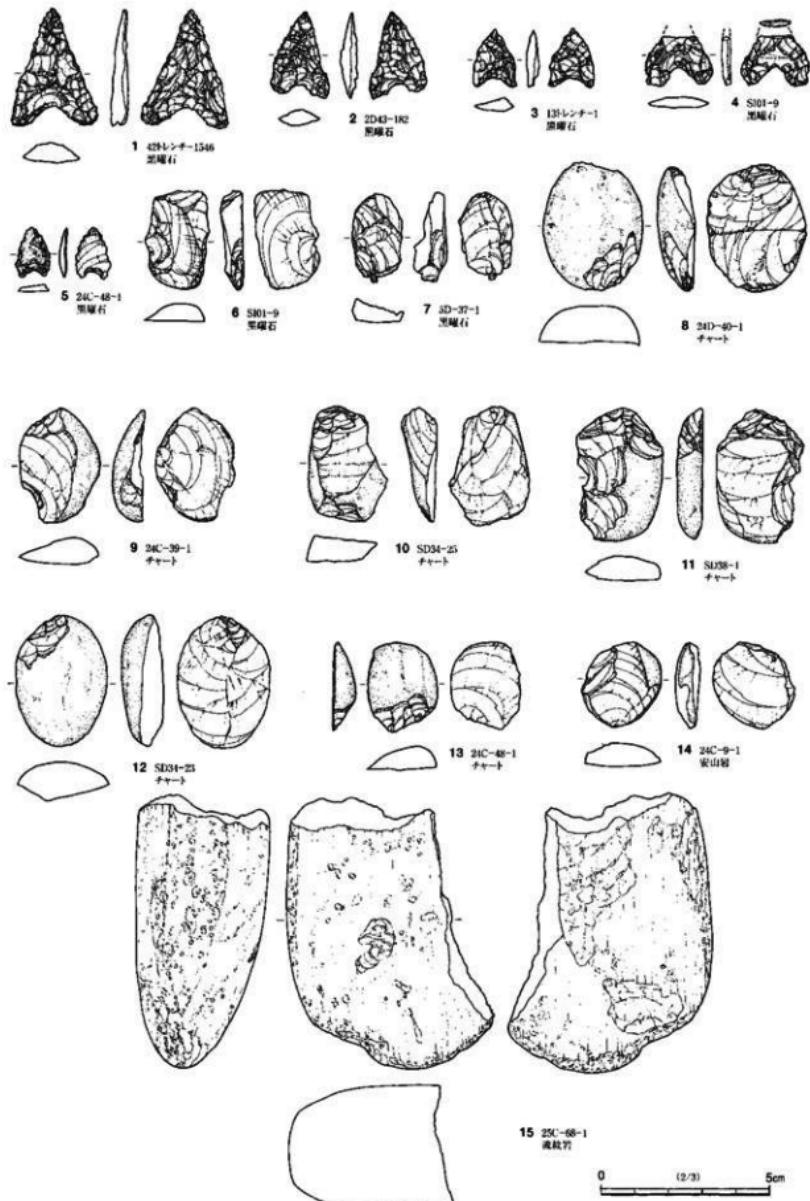
3



4



第19図 墨書土器・磁器・土製品・瓦類・転用砥石

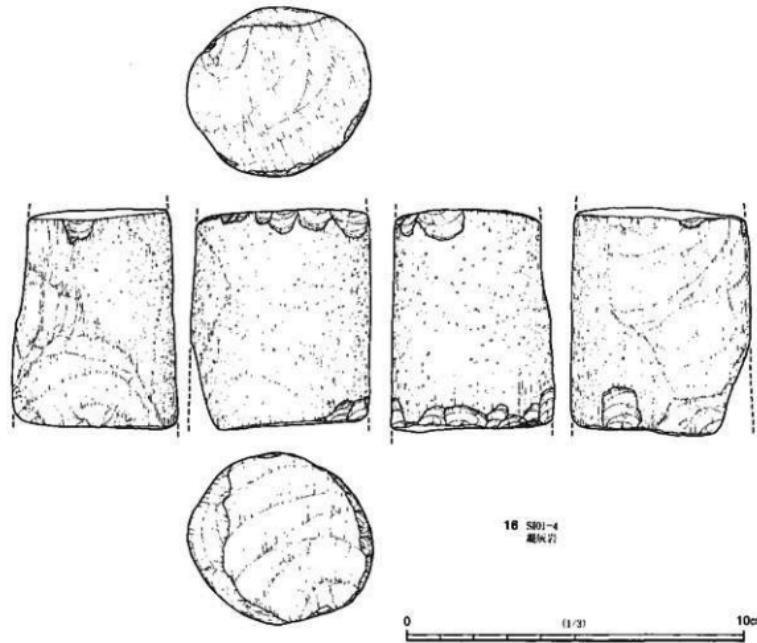


第20図 繩文時代の石器（1）

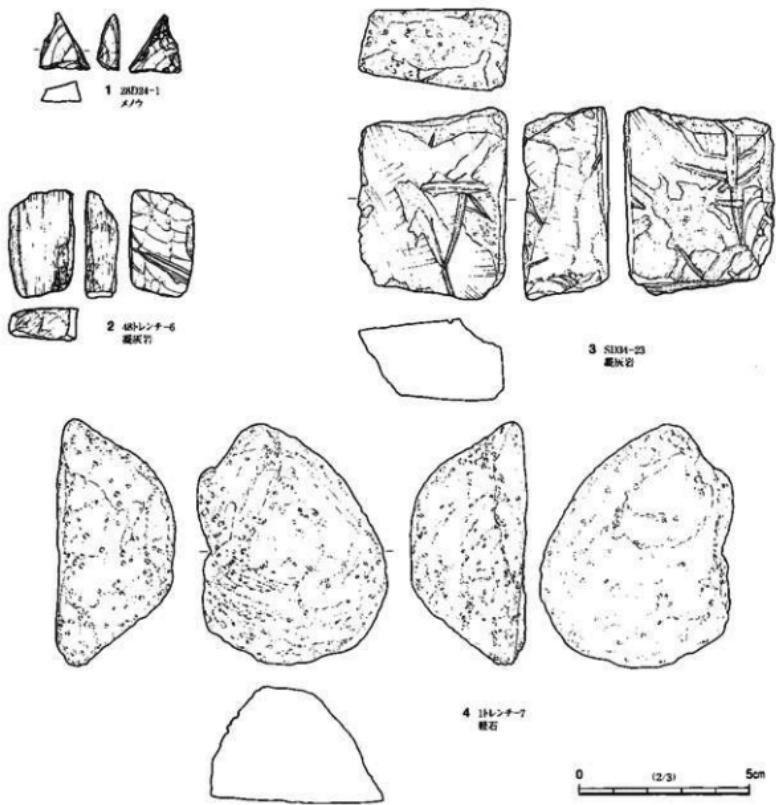
非常に大型の形状をしていたと推定できる。裏面に、多方向からの大きな剥離面がみられる。その形状から、大型の角礫状のものを素材として、多方向から成形を施して、角柱状の石棒の原形を造り出したと考えられる。角柱状の原形をもとに、研磨によって整形して石棒を製作している。破損面は、器体に対してほぼ直角に破損し、破損面にも、研磨跡がみられることから、意図的に切断した可能性が高い。破損面の縁辺には、連続する剥離がみられる。

(2) 出土状況と石器の所産時期 出土地点については、1の石錐がB地点出土で、そのほかのものは、D地点出土である。ただ、1の石錐は、勝坂式十器が出土したB地点出土であり、これらの上器との関連性が強いと考えられる。D地点出土の石器については、2～5の石錐と6・7の楔形石器は、同時期の可能性が高く、この地点の主体を占める利器であった。SI01出土の石器は、4・6・16である。このことから、黒曜石製の2～5の石錐と6・7の楔形石器の一群は、中期末～後期初頭の所産である可能性が高い。これに対して、8～14のチャート・安山岩製の楔形石器と15の敲石は、包含層出土である。包含層出土土器の時期は、前期後半から晩期まであるが、当該地域の前期後半から中期の石器の特徴として、チャートや安山岩の円礫を素材とした楔形石器が比較的多く出土することから、8～15の石器の所産時期は、前期後半から中期のものと考えられる。

その他の石器（第22図）



第21図 桧文時代の石器（2）



第22図 その他の石器

時期が不明のものを一括してその他の石器として取り扱った。おそらく、これらの石器は、中世以降の所産のものと考えられる。1はメノウ製の火打石である。2・3は凝灰岩製の砥石である。2は小形の手持ちの砥石と考えられる。裏面は、破損している。3は長方体の形状をしている。2・3ともに溝状の凹みがみられる。4は軽石である。軽石は、調査地全域で散漫に出土した。

注1 関口達彦 1990 「千葉市中原窯確認調査報告書」(財)千葉県文化財センター

2 なお「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)一千葉市・市原市・長生地区(改訂版)」1999 (財)千葉県文化財センターによれば、調査地の阿久川対岸に位置する富士見遺跡の採集遺物として、「布目瓦」との記載がある。

第3章 まとめ

第1節 繩文時代

今回の調査で、縄文土器はかなり広範囲にわたって出土した。ただもっとも古いものでも縄文時代前期後半で、それを遡る土器群については確認できなかった。これは沖積平野である茂原低地において、これまでのところ縄文時代前期後半以降の土器しか確認されていないという事実を追認した。しかし今回の調査ではこれに加えて、標高9m前後という極めて低いところで、中期末から後期初頭の竪穴住居SI01を検出した。しかも住居の中央付近には炉を設置し、埋甕も埋置するなど、低地における一定期間の居住を窺わせる貴重な遺構といえよう。過去に同じ砂堤帯上の小林西之前遺跡²¹でも川代遺跡とほぼ同時期の竪穴住居2軒を調査しており、中期末から後期初頭にかけて、阿久川と丘陵地帯との間に、砂堤帯上に確実な生活痕跡がみつかり始めているといえよう。

九十九里平野には砂州が弓なりの海岸線に平行して数列の砂州(砂堤)群が存在する。これらの砂州は、遙くとも縄文時代中期から後期になって砂州が形成されるようになったと考えられているが、前期の良好な資料も、出土点数こそ少ないが確実に存在するので、砂州の形成開始時期は少なくとも縄文時代前期後半までは遡るといえるであろう。今ここでその古環境まで復元するすべはないものの、現況でも砂州と堤間低地との比高は1m~2mしかなく、砂州を形成しつつあった縄文時代にあっては、砂堤帯上とはいえつつして好条件な環境ではなかったことは容易に想像できる。そうした環境に敢えて進出していったという事実から垣間見えるのは、自然環境の変化を敏感にとらえて、生活の場を拡大していく逞しい縄文人の姿といえようか。近年、海岸平野における縄文時代の生活痕跡に関する調査資料は着実に増えつつある。たとえば同じ九十九里平野の北端に位置する旭市仲島遺跡²²では、標高5.5m前後の砂堤帯上で縄文時代中期後半の炉跡を3基確認し、土器片錐や魚骨・貝類などの漁労活動を推測させる資料が出土している。しかし阿久川右岸の川代遺跡や小林西之前遺跡ではとくにそうした形跡はなく、むしろ台地上の生活ぶりを窺わせる資料群しか出土しなかった。今後低地での調査例が増加するなかで、低地における生活形態の比較検討も重要な課題の一つになるであろう。

ところでB地点で出土した中期勝坂期の入面把手土器14は、県内でも非常に希少な例である。胎土等から判断する限り、搬入品の可能性が非常に高い。それが遺構にも伴わず、古墳時代の土器群に混在していたので、かなり奇異な印象を受ける出土状況であった。

第2節 古墳時代

今回の調査成果のなかでは、古墳時代がもっとも充実している。とくにB地点では古墳時代前期の土器が狭い調査区のなかでまとまって出土した。土器の破面には摩耗した痕跡がほとんどなく、比較的新鮮な面を残していることから、ほぼ原位置に廃棄されていたものと思われる。またその出土状況から、一見散乱しているように見えるが、接合資料もしくは同一個体と思われる資料の分布が帶状になっていることから、出土した土器群は一連のものと考えられる。そこでまず出土した土器の様相について、おもな器種について整理しておきたい。

出土した土器群のなかで弥生時代の系譜をひく土器群は非常に少なく、図示した出土資料のなかでは、

IIの口縁部に細繩文を施した赤彩の壺が唯一である。そして壺類では刷毛目調整とミガキ調整するものとがみられるが、刷毛目調整を多用している。形態的には肩部の張り出しが強いのは13の壺ぐらいで、その他の壺の肩部の張りは小さく、底径も相応の大きさがある。なお口唇部や頸部に刻み等を行っていたり、輪積み痕跡を残したものはないので、壺よりもさらに弥生時代的な要素は希薄である。壺では、いわゆる小型丸底壺の出現がひとつの画期になるが、今回の出土資料のなかには確認できなかった。ただしこれは土器組成という点では、一般集落の例と直接比較するのは無理があるかもしれないが、十分条件を満たすものではない。器台には、口縁端部に面取りするものとしないものの2者が存在するが、いずれも脚部の裾はさほど広がらないのが特徴である。なお外来系と考えられる土器は16の壺が、いわゆる北陸系の土器になる可能性がある。以上から勘案して、ここではこれらの土器群については、大雜把ではあるが古墳時代前期中頃を中心とする土器群ととらえておきたい。A・C地点についても、B地点の土器群とさほど差違を認めにくいので、ほぼ同様の年代に位置づけておきたい。

そしてこれらの出土土器は遺構には直接伴っていないので、かなり特殊な出土状況といえる。この種の遺構は土器を集積した祭祀遺構と考えられており、古墳時代中期以降、類例は増えつつある。ただしその内容は多様で、土器集積とはいっても、土器以外にも玉・石製模造品・鉄製品・動物骨・焼土などが混在する例も多々ある¹⁰。ただ古墳時代前期となると、類例はかなり限られてしまう。そのなかにあって県内では安房郡白浜町小滝涼源寺遺跡が極めて注目される遺跡ではある¹¹。しかしその成立の背後に、当時の中央政権の存在すら窺わせるほどの内容をもつものなので、川代遺跡と同列に扱うにはかなり無理がある。むしろ類例は出原恵三氏が古墳時代の「水辺の祭祀」の変遷をまとめたなかに見いだすことができる¹²。氏がI類とした祭祀形態がそれで、その特徴は以下のようになる。遺跡は水害を受けやすい地点に立地し、遺物の出土状況は川もしくは溝を意識したもので、出土遺物の構成も大半を日常什器類が占め、いわゆる祭祀遺物といわれる石製模造品・玉類・手捏土器などの数が少ないという傾向があるといふ。

それらの諸点を川代遺跡のB地点の例で比較してみると、洪水等で冠水しやすい立地は、阿久川が逆U字状に大きく流れを変える地点の下流に調査地が位置し、平成8年9月の台風17号による冠水範囲も示した第2図でみても、調査地は確実に被災している。ただこの被災範囲は、現代の開発によって土地の保水率が低下したことも災害を大きくした要因の一つなので、幾分は差し引かなければならないにしても、現河川と遺構面との比高が2m~3mしかないことから類推すると、被災しやすいという評価は動かしにくいでであろう。そして微高地の先端で土器群が川と平行に帯状に連なった出土状況から、川を意識していると見なせるであろう。また特定な祭祀遺物は皆無に近い。

以上から氏が設定した類型の要件はほぼ満たしているので、今回の調査例を「水辺の祭祀」の1例とみなすことは可能であろう。しかしその具体的な祭祀のあり方まで言及するにはかなり限界がある。ただ少し付け加えておけば、出原氏は使用された日常什器類の器種について、壺類の多さに注目している。そして壺類に被熱痕跡があることから、祭祀行為に伴う形跡とみる。今回は数量化できなかったが、確かに今回の出土資料の中にも、図示できた資料が少なかっただけで、壺類は少なからず存在し、そこに被熱痕跡もかなり確認できた。ただその痕跡が氏のいうように祭祀行為に基づく結果とするには、今回の場合加熱か所が不明だし、加熱時に生じたであろう焼土等も確認できなかったので、加熱か所が離れるのか、単に日常品を祭祀に伴って廻棄したのか、にわかには判断できない。

なお県内では似たような立地状況で土器が集中して出土した調査例がいくつかある。香取郡山田町向井

内遺跡では古墳時代中期を中心とする土器の集中か所と同時期の土坑を1基調査している¹。同遺跡は標高は3mほどで、現黒部川から20mほど離れ、現水面との比高は1m～2mのところに位置している。報告ではその性格について、祭祀に関連するのか、単なる土器の廃棄場なのか結論づけられないとしているが、手握土器・壺・小型壺などの日常什器とは異なる器種が比較的多く、祭祀関連の遺跡である可能性が指摘されている。また川代遺跡と同じ茂原市の第六天向遺跡は旧一宮川から数十mの北側の、砂堤帶上で土器の集中か所を確認しているが²、生活遺構とも重複しているために詳細はわからないが、あるいは類例として追加できるのかもしれない。

第3節 奈良・平安時代

奈良・平安時代の確実な遺構としては、土坑と溝しか確認できなかった。それらから出土した土師器坏類の成形技法を確認できた範囲ではすべてロクロ成形であった。3・4はかなり底径が小さく、口径も10cm前後と非常に小型になり、新しい様相の土器であることを窺わせるが、比較資料に乏しい。また10は壺器碗を模したものなので、これらが全体のなかで新しい様相の上器群である。3・4はともかく、10については9世紀末から10世紀初頭頃と考えておきたい。それら以外は9世紀後半という時間幅のなかにおさまる土器群であろう。14の壺についての確定た年代の根拠は持ち合せていない。伴出した坏類と同時期だとすれば9世紀後半になる。ただこれを中原窯の製品だとすると、中原窯の操業時期はおもに9世紀前半を中心とする時期が想定されているので、やや時期的にずれもある。ただ消費地では、その年代観にさらに幅がありそうなので³、この壺についても想定されている窯の年代よりも、新しい段階のものと考えておきたい。それら以外は9世紀後半の様相としておきたい。なお須恵器は出土量が少なく、しかも8世紀代の土器群が少ないこともあってか、永田・不入窯の製品は確認できなかった。須恵器の生産地はおもに千葉市域産といわれるもので、なかでも中原・宇津志野窯と推定される製品がほとんどを占めるようである。

奈良・平安時代の遺構としてはおもにこの溝だけだが、溝に水流があったような形跡もなく、その性格についてははっきりしない。周辺の調査成果をみると、(財)越南文化財センターが今回の調査地に近い地点⁴を調査した際にも、平安時代とみられる溝を数条確認している。今回の調査成果と一連のものという保証はないが、平安時代のある時期に現阿久川に近い砂堤帶上で、かなり広範囲に溝を掘るような土地利用が行われた様子をうかがわせる。

注1 津田芳男 1985 「小林西之前遺跡」(財)茂原市文化財センター

2 (財)東総文化財センター 1998 「仲島遺跡」『東総文化財センターニュースレター』(平成7・8年度)

3 高橋誠 1989 「特論I 土器集積の意味するもの」「南羽鳥遺跡群—中幡第1遺跡F地点—」(財)印旛郡市文化財センター

4 大淵淳志ほか 1989 「小滝涼源寺遺跡—千葉県安房郡白浜町祭祀遺跡の調査」朝夷地区教育委員会・白浜町

大淵淳志 1989 「祭祀遺跡小滝涼源寺遺跡を中心とする祭祀遺跡の一考察」「日本考古学研究所年報X」日本考古学研究所

大淵淳志 1994 「祭祀遺跡小滝涼源寺遺跡—房総半島最南端古墳時代の祭祀遺跡の研究—」

- 5 出原恵三 1990 「祭祀発展の諸段階」『考古学研究』第36巻第4号 考古学研究会
- 6 荒井世志紀 2000 「向井内遺跡」(財)香取郡市文化財センター
- 7 三浦和信 1988 「第六天向遺跡」(財)茂原市文化財センター
- 8 郷堀英司・小林信一 1993 「須恵器生産の変遷」『研究紀要』14 (財)千葉県文化財センター
- 9 風間俊人 2000 「川代遺跡」『年報No11』(財)總南文化財センター

写真図版・図面



図版2 A・B地点



1 A・B地点遠景（南東から）



2 A地点全景（南から）



1 A地点遺物出土状況（南東から）

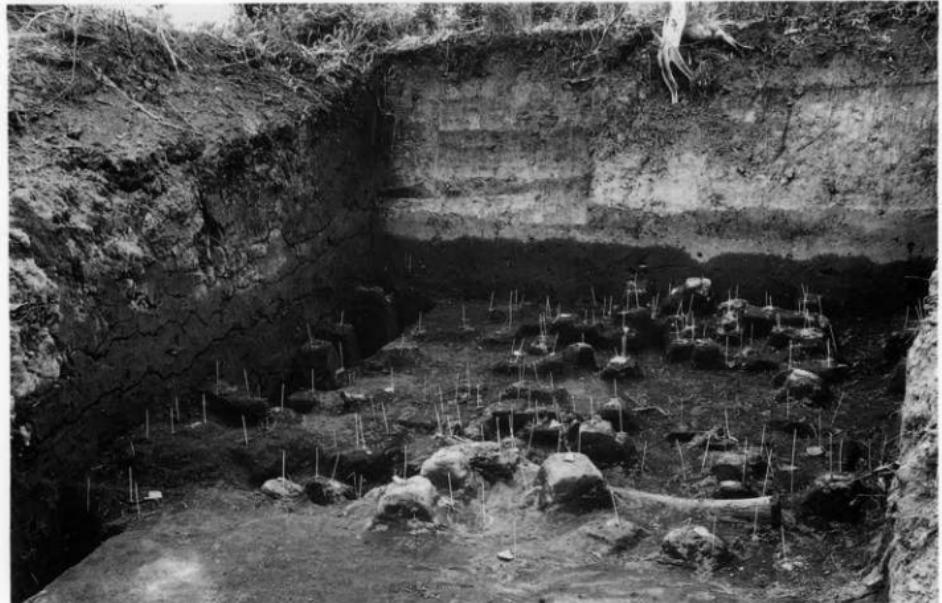


2 A地点遺物出土状況（北東から）



3 A地点遺物出土状況（南から）

図版4 B地点



1 B地点確認調査状況（東から）



2 B地点近景（南東から）



1 B 地点全景（南から）



2 B 地点全景（北西から）

図版6 B地点



1 SK27全景（東から）



2 B地点遺物出土状況（北から）



3 B地点遺物出土状況（北西から）



4 B地点遺物出土状況（東から）



5 B地点遺物出土状況（東から）



6 B地点遺物出土状況（北東から）



7 B地点調査風景（南から）



8 B地点実測風景（北西から）



1 C 地点遠景（北から）



2 C 地点全景（南から）



3 SK23全景（南から）



4 SK23断面（南から）

図版8 D地点



1 D地点遠景（北から）



2 D地点近景（南から）



1 SI01全景（南から）



2 SI01埋甕全景（北東から）

図版10 土器類 古墳時代（1）



(26)



(3)



(19)



(18)



(1)



(15)



(28)



(49)



(31)



(7)



(32)



(45)



(53)



(37)



(36)



(35)



(38)



(42)



(40)



(39)



(41)



(44)



(43)



(8)



(10)



(6)



(17)



(14)

図版12 土器類 繩文時代（1）



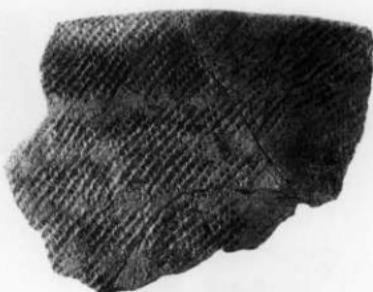
(8)



(1)



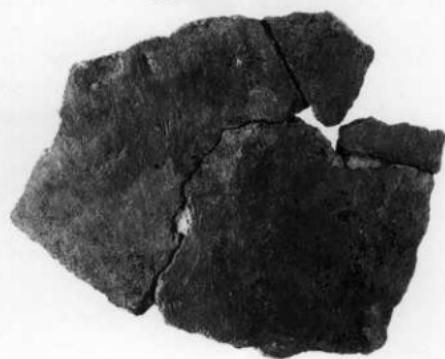
(2)



(3)



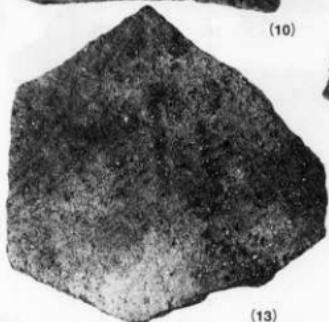
(4)



(5)



(6)



(9)

(10)

(11)

(12)



(14)

(14)



(14)

(14')

図版14 土器類 縄文時代 (3)・石器類 縄文時代



(15)

(17)

(18)

(16)

(19)



(1)

(2)

(3)

(4)

(5)



(6)

(7)

(8)

(9)



(10)

(11)

(12)

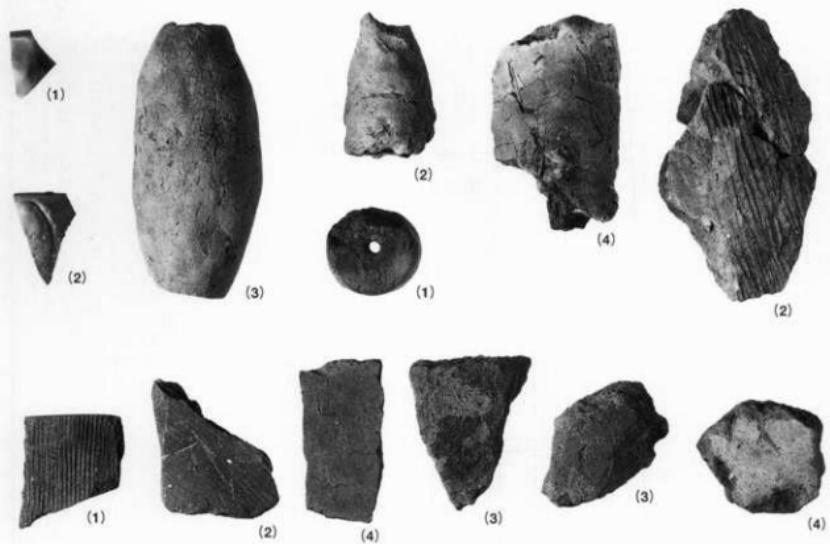
(13)

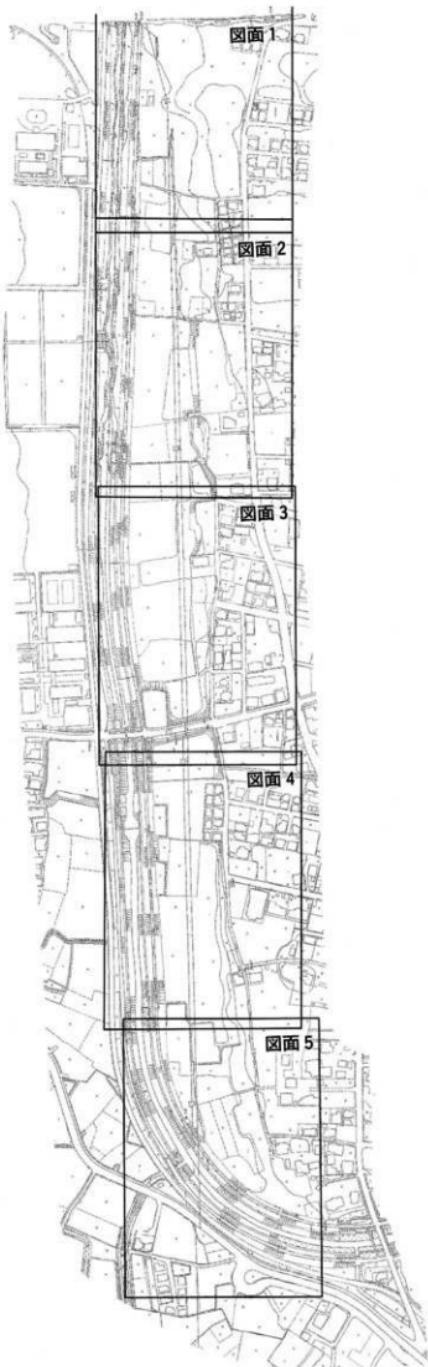
(14)



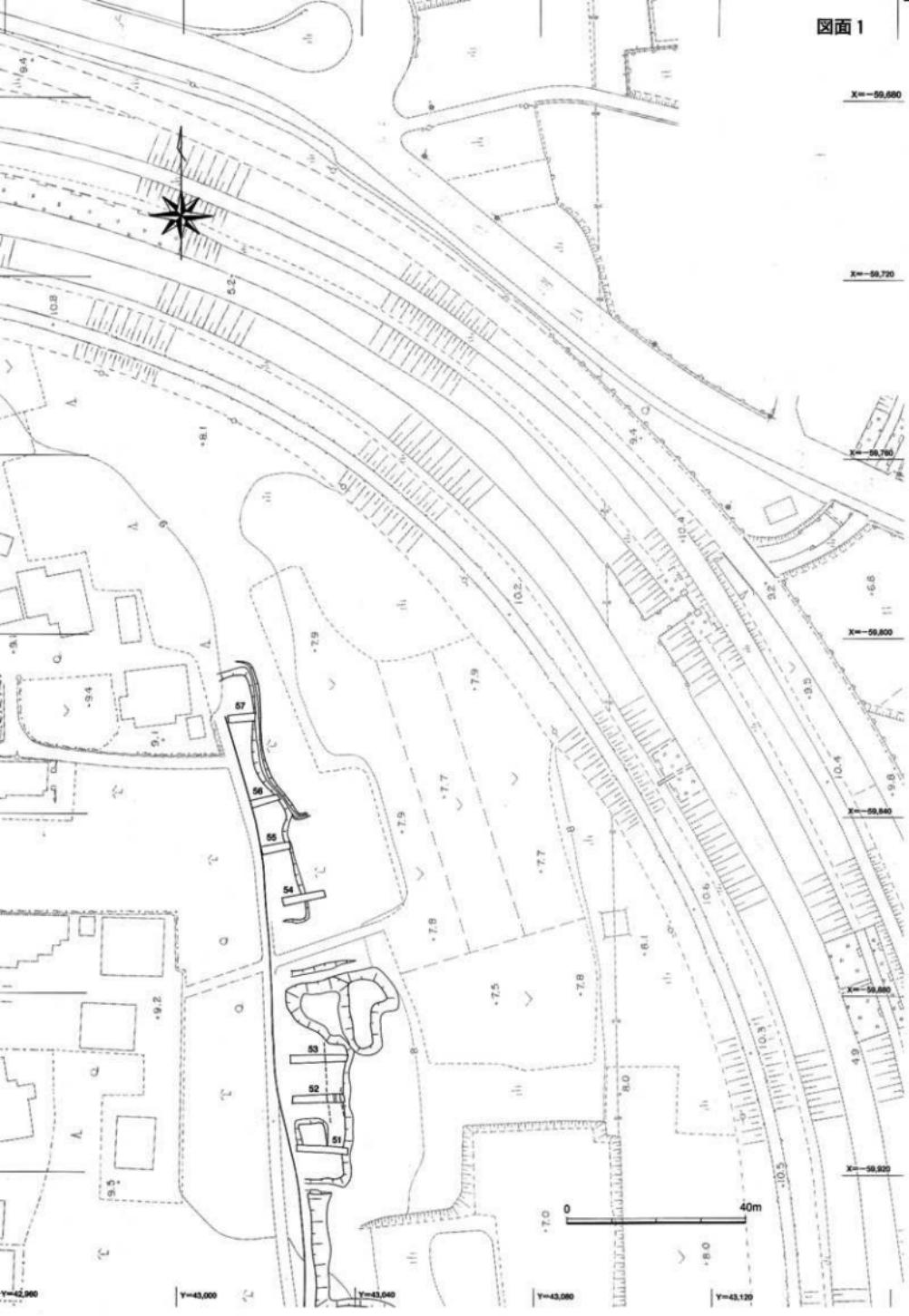
(16)

(15)





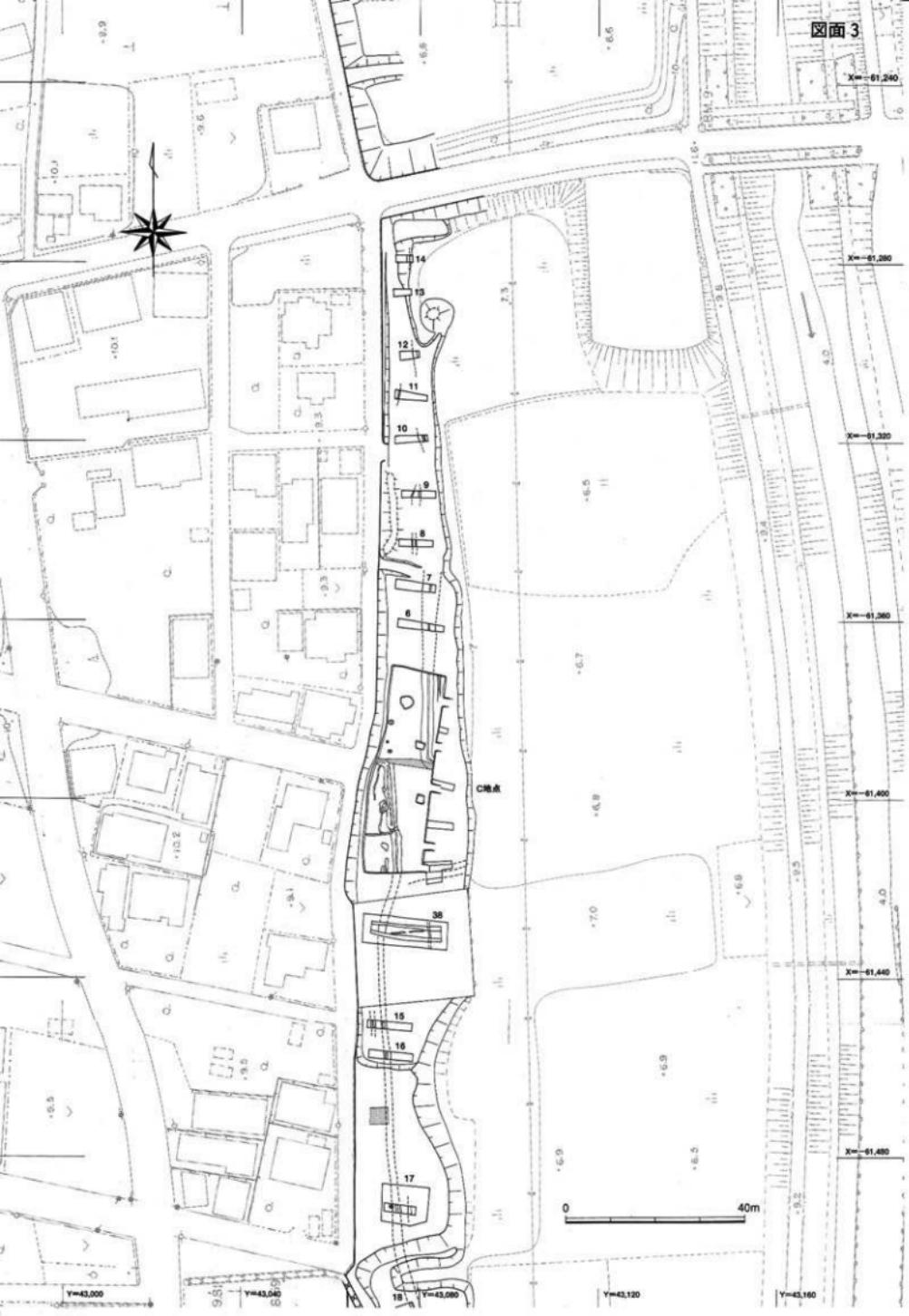
図面1



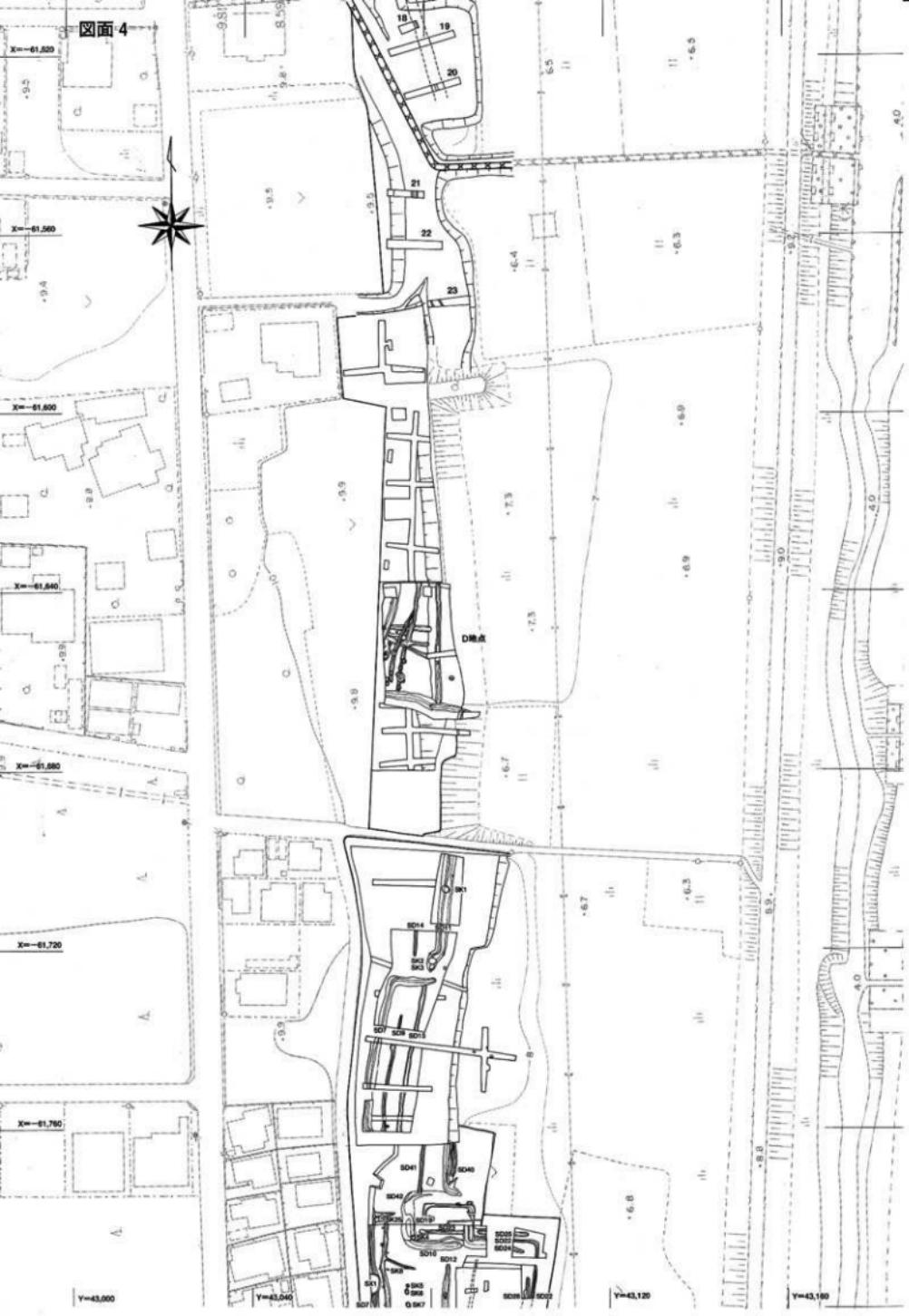
図面2



図面 3



図面4



図面5

X=61,800



報告書抄録

ふりがな	もばらしかわしろいせき
書名	茂原市川代遺跡
副書名	河川激甚災害対策阿久川調節池埋蔵文化財調査報告書
卷次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第437集
編著者名	今泉 潔
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦 2002年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川代	千葉県 茂原市小林 字川代 3,215他	12210	005	35度 26分 44秒	140度 18分 29秒	20000201～ 20000327 20000619～ 20000929	4,100m ² 1,800m ²	河川激甚災害 対策特別緊急 委託阿久川調 節池に伴う事 前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川代	包蔵地	縄文時代	埋壺 1基	楕文土器（前期～晚期）、石器（石礫・石棒・楔型石器）	縄文時代の竪穴住居は住居内に埋壺が設置された後期初頭の住居で、低地においてはまだ類例の少ない居住痕跡のひとつになる。また古墳時代前期の土器集中地
		古墳時代	土器集中地点 3か所 土坑 2基	土師器	点は、いずれもその立地から、古墳時代前期の水辺の祭祀に関連するものと思われる。
		奈良・平安時代	溝 3条	土師器、須恵器、瓦、転用砥石、墨書き器（「本」）	
		中世		青磁	

千葉県文化財センター調査報告第437集

茂原市川代遺跡

—河川激甚災害対策阿久川調節池埋蔵文化財調査報告書—

平成14年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

発 行 千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町1-10-6